○中塔娘の寢言を聞けば、嫁に行きたや田どころへ

○禿げで名題は大澤寺山、安曇平を一と照らし

○わたしや光の白牧生れ、安曇平を見て暮らす

【解四十一】 東筑上川手村字光の城山の上に蜂、子の神、白牧等の部落がある。特に白牧は其の山頂の西側に在り、其れに夕日のさす頃は安曇平から其の部落が如何にも盆景でゞもあるが如く懐しきものに眺められるのである。

◎塚田山から中村見れば、柿に夕日が赤々と

【解四十二】 北安陸郷村は犀川を隔てゝ東岸なる東筑の生坂、東川手村に對し其の中心部落たる字中村は柿の產地また瓦燒きの本場である。

○白馬颪にたてがみ振るひ、駒はいなゝく親の原

【解四十三】 親の原牧場は白馬登山口四ツ谷の一里餘北なる高原に在り。其の邊より神の田圃、天狗原、白馬大池等を經て白馬に登る道が開けて居る。

○四ヶ庄馬どこ馬喰さ行けば、蕎麥や煮かけで持てはやす

○夏は牧場のお平の原(烏川村)も、秋は尾花が月を招く

○俺等が安曇は素晴らし所、槍も白馬も庭續き

○何處と聞かれて安曇と云へば、安曇踊を所望された

○安曇筑摩の隔てを結ぶ、いきな橋だよ睦橋

○小谷街道の雪解け見れば、屋根に上がりし馬の沓

【解四十四】 冬は積雪多き爲め人馬の往還が人家の屋根よりもなほ高くなる。隨て脫ぎ捨てた草鞋や馬の沓が春の雪解と共に路傍の高い木の枝や人家の屋根にも發見される次第なり。

○春の雪解け登波離を通りや、路は赤粘すべり路

○潮澤奥まだ家やあるか、谷の彼方に鶏のこゑ

【解四十五】 斯かる平和な山村からも騷動が蜂起した事があるとは油斷が成らぬと云はうか。其れも餘り昔の話では無く、明治二年の事、凶作だつたので先づ會田に騷動が起り、南安重柳まで押して來て鎭壓されたが、其れと前後して此の潮澤から起つた騷動は、北安池田町方面を刧掠する目的で、竹槍や蓆旗行く〳〵法螺貝を吹き上げ、八月二十六日字竹の花から西北へ山越しをして小立野に出で、二十七日朝下生野酒造家平林虎一方に殺到、鱈腹酒を振舞はせ酔ひの廻る勢で犀川端に繰出し、對岸を怒鳴り附けて隱した舟を出させ小泉に押渡つた頃は鯨飲の效果覿面歩行蹣跚の態と相成り、或ひは藪下に這ひ込み或ひは畑の中なのたくり廻り、其れでも討ち漏らされの郎等二百餘人、庄屋牛越長平方に着到して、管を捲き〳〵打毀はしに始まる。氣

の利いた村民等其の間に入り、大豪三十駄、小豪二寸駄大安堵の契約書なるものを出して講和談判やゝ成立、炊き出しが出來たと云ふので腹ごしらへに始まつた所へ、落の人數押來り空砲打かけ彼方此方へ追ひ廻して三十餘人を召捕り、其の餘の要領の好いのは雲を霞、有りがたい事には御奉行樣はじめ落士以下數十人、御滯在四日の後漸くの事で御歸落、其れや此れやのお會計金百二十圓也は須く池田組負擔の事と心得可申候事。

○かはいさうだよ藪鶯が、鹿島源汲の奥で啼く

【解四十六】 平村の內鹿島及び源汲は實に北安の別天地である。南、源汲は鹿島川に隨つて安曇平に出て得れども、北なる鹿島は小熊山の尾根續きを越して僅かに海ノ口北村又は中綱湖の岸に至るのみ。其の鹿島と稱する所以は天文三年大地震で西の山が崩れ川流を堰き止めた爲めに此の邊は忽ち大きな湖水となつてしまつた事がある。よつて地震除けとして常陸の鹿島神を勸請し又要石を祀り地名をも鹿島と改めたと云ふ。今も部落の最北端即ち奥の方に鹿島明神あり又東南方即ち部落の入口なる鹿島川に臨む臺地上に要石あり。要石は木柵を圍らし許ほどの石片二本立てかけあり。何れも自然石である。一本は長さ一〇〇センチ、太さ六〇センチで其の鞘形（太さを測る可く引き廻らした紐などの成す輪を鞘と云ひ其の輪の形を鞘形と云ふ、是れ斯かる物を記錄する際に用ゆる著者一家の術語であると覺し召せ）は多角形、鞘形の最大徑二〇センチ程、又他の一本は前のものより稍や太短く長さ七〇センチ、太さ七〇センチ鞘形稍や長方形にして其の最大徑二五センチ程、二本とも其の端は鈍角に終り且つ石面の具合より察して同

一本の二本に折れたるものとは思はれず元來別々の石片なるもの、如し。但し石質は相同じく共に灰白色なるも細長き方やゝ青味あり、又同質の石此のあたりの路上にても散見し得べく變質岩の類かと思はる。さて此の要石、昔は地より生へたるが如く屹立せしが或る時僧場の若い衆來りて戯れ石を打當てゝ〳〵〳〵折つて仕舞つたと云ふので其の根と云ふもの地面と摺れ〳〵に殘りあり寄生する雉を分けて之を見る事が出來る。右照戯れ若い衆は神罰覿面、家に歸るや直ちに病み附き死んでしまつたと云ふ。今木柵の內、小梨の木一本生ひ立ち太さ六五センチ高さ約二間、遠方よりの目標と成る。なほ之より南方十數町、源汲部落の北端なる林藪中に立石なるものあり（以下源汲學校にて武居正人先生より伺つた話）其れは自然石の柱で地上六尺、巾八九寸、眞直ぐに突立つて押せども動かず地に入る事の頗る深きを知る。目通りの高さにて穴一つあり、昔源汲の山に籠つたギシキ八面大王が田村將軍の軍勢に對つて盛んに岩石を投げた其の一個が地に突立つたもの即ち此れで、又前記の穴は將軍が新たに鍛へさせた刀を突き通して其の利鈍を試みた痕跡であると云ふ。兎に角昔此の邊は立石六軒と云はれた部落のあつた程で、此の石の如何に古い時代から有名であつたかゝ解かる。又源汲の南なる大出より籠川の谷を溯ること一里、斷崖の上に自然の岩窟あり、右ギシキの岩屋と云はれて居るが其の所、岩ぐみ頗る險阻にして寄り附くこと能はず積雪の時カンジキを穿いて辛うじて登り得るとの事。

○藪の中だによくこそ御座れ、お手が切れつら萱の葉で

◎いやな山家だ朝日がさゝぬ、鷄の鳴く聲ヨ聞くばかり

◎山家〳〵と里衆はおしやる、里も其の先きや山續き

○梅を暦の橋場の奥も、今はラヂオで世間並み

○橋場入りから出て來る炭の、もとは奈川の山櫻

○はやく種播きを濟まして置いて、花の安曇野一とめぐり

○破れ菅笠下堀を通り、歌に詠まれた其の笠を

【解四十七】 南安曇烏川村下堀は安曇節歌人の混雜たること序文を參照せられよ。

○野澤通りて角影、立田、越せば上野のお庚申

○川の彼方は森口、三溝、舟に棹さす渡守

○穗高明神、豐科藝者、中の柏矢町玄蕃樣（玄番表は博百）（二十四參照）

○トヽン豐科太鼓や鼓、續く下堀薬きぬた

○西は高瀨で東は山で、心細さよ社村

○君を見染めて會染（地名）來たに、十貫（地名）なんせとは情無い

○安曇、筑摩が手に手を取りて、進む文化の木戸の橋

○夜さり通れば睦の橋は、安曇踊で通れない。

○野暮な自動軍通して置いて、又も踊の睦橋

【解四十八】 木戸橋、睦橋、山清路橋と犀川にはモダンな橋が次ぎから次ぎへ架けられたに係らず高瀨川方面には、ロクな橋は一つも無い。寧ろ其の支流の鹿島川を溯つて瀬く要橋と云ふ小モダン橋が一つ出來たゞけである。高瀨沿岸の人々よ、願はくは次ぎなる歌を昔語りに終らしめよ。

○高瀨がつたら橋ア手に手を取りて、渡る娘も命がけ

○信濃鐵道十里が程は、日本アルプス窓去らぬ

○汽車が越後へ通じたなれば、安曇踊を乘せてやる

○山の奥でも眞夏の頃は、尋ね行きたや上高地

○千國街道は山の腰を通る、安曇を一と目に見て通る

○千國街道は野道となりて、心細さよ糸すゝき

【俳四十九】　茲に謂ふ千國街道は遙かの後世に行はれた交通であつて、彼の西の方、山から山を辿つた上代の、千國古道と云はれるものに比すればずつと平地に下つて居るのである。其れさへ野道となつて茫々たる枯尾花のうちに消えて行くを思へば時の流れは恨めしいものゝやうにも感じられる。

○お日は短し安曇野長し、わるべ泣かせにさす夕日

【俳五十】　安曇野より眺めて東方、筑摩アルプスの一部武石峠附近は夕日の最も遅くまで當つて居る所である。昔子供を連れて西の山へ仕事に上つた男、日の入り過ぎもなほ其處に夕日のさして居るを好い事にして泣く子を賺し乍ら仕事に夢中となつて居るうち本當に暗くなつてしまつたので歸るに大難澁したと云ふ。其れから夕陽の殘る筑摩アルプスの其の邊を童泣かせと云ひ出したと。

○おらも成りたや鉢伏山に、諏訪と安曇を見て暮らす

○高瀬入りから時雨に追はれ、追ひ越されたが笹平

○淋し安曇野あの雪原を、見れば一と筋汽車の烟

【俳五十一】　今は電車であるが安曇節の出來た頃は見るも可憐な小さい汽車であつた。

○四ヶ庄雪どこ炭薪積んで、橇で曳き出す四ツ谷まで

○小谷大網は越後の境、槍や穂高は飛彈さかひ

坂及び峠　○安曇佐野坂、南は木崎、北は姫川越後まで

○蝶々追ひ越し又追ひ越され、春の佐野坂唄で越す

○銜へぎせるで佐野坂越せば、固い手のひら煙草盆

○春の安曇野佐野坂越せば、二十日おくれて花が咲く

◎小谷四ヶ庄は涙に曇る、此所は佐野坂別れどこ

◎心細々佐野坂越せば、梁場あたりの夕時雨

◎雪は降る〳〵積もらぬ先きに、連れて越しましよ佐野坂を

○積もる白雪佐野坂越して、橇で客引く小谷まで

○客の顏見て火を焚きつける、此處は法道の峯の茶屋（池田町の東山中）

○駄馬ぼく〳〵大峯越して、附けて行くのは米と酒（同前）

○薫る鈴蘭名も鷹狩の、山を越ゆれば八坂村

○八坂々路雜役（牝馬の事）牽けば、たうね（當年の意仔馬の事）後からぼく〳〵と

○科野坂（山房温泉への途り）越しやどんごろ落ちて、菅の小笠に穴があく

◎安曇見納め鹽尻峠、雲に顔出せ爺ケ岳

◎野麥峠で故郷を見れば、故郷隔てる雲と山

【解五十二】此の峠篤り多く野生し其の實が所謂野麥で食べることが出來る。

四名所

名勝

○城ケ峯から引く春霞、花に影さす櫻澤

【解五十三】城ケ峰、櫻澤ともに鼠穴に在り。櫻澤には枝垂櫻の巨木ありて古來地名を成し、嘗て鼠穴山櫻澤寺もあつた。

◎小丸山から明賀を見れば、續く麥畑青々と

【解五十四】小丸山は犀川に臨んだ陸郷村の名所で頂上には專光寺を移して堂が出來、また山一面に櫻を植ゑ付けた。此處から見ると犀川を越して東筑の清水、明賀、深見澤、上生野等の山村繪の如く續き又目の下の犀川には岩城淵と云ふ絶景もある。

○花の咲く時掛茶屋出來て、財布はたいて小丸山

○下る犀川荷舟の中へ、小丸山から花吹雪

○小丸山にて娘衆踊りや、縣道行く人皆とまる

○想ひ懸ければ千仞の谷も、越えてかけます登波離橋

【解五十五】登波離橋は池田町の東方一里の山中に在り。斷崖から斷崖へ架けた所謂陸橋で春は藤つゝじ秋は紅葉に都人士の杖を曳くもの少なからず、一日の清遊には格構の勝地である。東方一町に名木二本松あり、犀川を目の下にして對岸生坂を臨む亦得難き眺望の一つ。

○藤の谷からつゝじの谷へ、かけた虹かや登波離橋

○水の流れの無いとはり橋、谷の藤浪水と見る

○今日は見た〳〵とはりの橋で、上がる雲雀の背中見た

○躑躅燃え立つ須砂渡の山で、人におどけて（驚いて）雉子が立つ

○春の名殘りの山清路下り、舟に散り來る山つゝじ

【解五十六】山清路は八坂村金熊川の落ち口より東筑麻續川落ち口に到る間の犀川峽谷で、續いて其の麻續川を溯れば約一里にして坂北村差切新道の奇勝を探ることが出來る。又山清路下り

と云ふのは東筑明科驛又は潮の木戸あたりより輕舟を浮べて犀川を下るので天龍下りの如き危險無く、しかも兩岸風景の變化は應接に遑無きものあり、晩春の候、數名の團體を以て一日の舟行を試みるべく最も妙。

○引いた弓ほど曲りし川に、舟は矢を射る山清路

○居谷里好いとこ繪にかくならば、直ぐに間に合ふ硯水

【解五十七】 居谷里の池、名泉硯水、ともに大町の東北半里にあり。大町水道の水源に當る。

○天王澤をば大町イ引かれ、居谷里池の鯉喉乾した

○吹けよ川風つり橋を吹けよ、乳川つり橋夕涼み

○乳川つり橋風吹きやゆれる、風のあい間に渡らしやれ

【解五十八】 此の風流な吊橋は神戸權現樣の東方にあつたが今はコンクリ橋に變つた

◎名こそ梓の水上なれど眺め涼しき上高地

◎槍や穗高を屏風に立てゝ、中に涼しき上高地

○千草八千草神戸の原で、銀の鈴振る虫の聲

○神戸原行きや茅萱の中で、萱も虫鳴く鈴虫が

○お月やちよろりと出りや神戸の原で、鳴くよ鈴虫やりん〳〵と

○更ける秋の夜鈴虫鳴いて、月に明かるい神戸原

○昔船方虫鳴く草野、今は名に負ふおかめ樣

【解五十九】 穗高の弘綿樣（眞龍院第四世、享保十九年十月二十四日入定）眞々部の行人樣（根誉行人と云ふ、入定年代等詳かならず）など史實に基く生拔傳說に伴れて、綱野の船方なるおかめ樣のやうな無緣墓乃至住居趾から一轉して、姓んだ美女が生埋めにされたと云ふやうな俗說も飛び出して來る。おかめ樣を云ひ出したのは此の十年間ほどであるが今では飄つて生計を立つるもの數十戶に及び信鐵會社や自動車屋さんの守本尊の如くにもなつて來た。讀いて外各地にも流行神樣が續出したが、吾等は玆には右おかめ樣出現の字フナガタなる地名に就て考へて見たい。穗高神社文書中、文明十五年や長享三年の遷宮定日記には見えて居ないが、明應十年になると橋爪、耳塚、船方、池田、庄科、……重柳、猪鹿牧、杭戶、多々井、……狐島、堰金、綱野、加治屋毛見、板取、北大和田、菅沼等が擧げられて居る。其のうち杭戶は今の松川村字神戶ならんと云へど、抑も神戶は野手一帶の廣い地籍で、其のうちに含まれる一個として の神戶村は慶安四年に始まり承應二年はじめて檢地。隨て右足利氏末葉などに一個として穗高

宮御造營の分擔に任じ得るやうな村のあつた筈は無い（勿論なほ遙か上世の事は又之を知らず）。されば右杭戸は其の配列順の如く猪鹿牧や多々井の附近ではあるまいか。さて右にて耳塚と池田との間に船方あり。なほ又穗高神社傍社家文書中、穗高式地社として五十四社を擧げたるうち細野大明神社、船方鄕有明權現社、板取鄕大明神社、松川鄕大和田大明神社等が出て居る（此の文書天正七年仁科盛貞在判、穗高町上條清文大人より報ぜらる）。別に又某文書（事情あり、特に名を秘す）に「人皇五十一代平城天皇御宇鳥咄權現は熊野勸請也、田村將軍御陣所川中明神と申候、是島宮也」とある。尤も此の文書はずつと新しく元祿十四年の手記であるが、恐らく當時は右鳥咄權現なるものは既に無く、單に史實として傳へたに過ぎぬ事は確實で、少し降つた享保十一年の村々方角宮寺高家數人數調べにも其の傳らしきものさへ出て居らぬのである。が前の穗高文書の船方が舟澤、舟縣、或ひは矢張り舟乘り衆を意味する船方の何れかであり舟に關した地名であると決定し得るならば、其れは後の某文書の川中明神と云ひ島宮と云ふたとあると相應じて共に水鄕に關係有るものと云ふべく、又有明山の古名は戸枚嶽、鳥放嶽、鳥咄嶽）であるから右船方の有明權現社と川中明神島宮の鳥咄大權現とは別のものでは無いと思はれる。さて又今の松川村神戸原なる有明山社、舊稱有明山戸放大權現は寛永十四年創立て、其れ以前は約十丁ほど西南、字トリヤツコに單なる齋場があり、年々有明山を遙拜したのだと云ふから、天正七年の船方鄕有明權現社又は島宮戸放大權現は遲くとも此の寛永十四年までの約六十年間に湮滅し去つたものである。其れは正さに豐臣から德川への時代である。右等を綜

合して、船方が戰國時代の終りまで相當の大鄕であり、其の位地は細野、板取に隣りし、其處に有明山を遙拜した社があつた事、其して其の社の異名によりても其の邊は一種の水鄕であつた事などが知られるのである。が更に想像を逞うせしむるなれば所謂川中明神島宮は卽ち川間明神、川會神社で、式內社であり乍ら中世より知られなく成り、元祿十年の正保國絵圖改正にも「川會神社と申す宮安曇郡の內に有之哉」など鐘太鼓で探され、其の宮では無かつたかなど思はしめるのである。卽ち安曇祖神を祀つた川會神社に、此の地方治水の川會公の祖多岐波世君を合祀、後其の西方トリヤツコの屋代と結び附いて戶放嶽天鋼女命崇拜となり、更らに本地垂迹時代に入り熊野權現勸請などゝなつたものではあるまいか。事實此んな風にでも成つて行かねば式內社ともあらうものが湮滅して行く筋が有るまいと考へられる。其處で現在の會染村字十日市場村社川會神社も勿論昔の式內川會神社の系統を追ふものなるべく、其の境域も高瀨川に沿ひ居り、昔の船方と同一延長に在るであらう。一方に又近年細野おかめ樣の出現せられた地籍は現に今船方と云つて居り其れは高瀨川と乳川との間に挾まれた島の如き所で（南方半里に鳥新田と云ふ地名も有る）昔から此の船方（某文書の島宮鎭座地）の名跡を傳へた地名であると信ぜねばならぬのである。果して然らば今日のおかめ樣は、戰國時代以前に莊嚴を極めた川中明神、有明大權現の故地へ再び天鋼女命が出現し給へるものか。元來おかめは吾が美しい娘を葬ねて此の地へ來り、其の娘には雜產にて先立たれ、寂寥の一代を其處に終つた老女性の名であつた

と云ふが、俗信に鴨神おかめは天鈿女であるから前記老女を天鈿女の再來と考へては何うだらう。勿論此れは信仰上の話である。兎に角此の神は岩戸神樂や天の八衢の昔から、天孫の御降介で猿田彦命に嫁ひ伊勢に下るに到るまで、一生を通じて濶達の女神に在したので（道祖神を此の二神とする俗説もある）昔からの神戸原や又宮城の奥だけでは時代に順應した功徳を垂れ給ふこともどかしく、今都方が諸民統率の八衢となつたので再び其處に御出現、衆生濟度特に女の願ひなら何でも一度は叶へ下さる靈驗のいやちこさを示し給ふものであらうか。但し末法の世、生身のおかめが横合ひから矢鱈と出現、憂たてや男の願まで叶へるの咬有り、名物おかめ饅頭も品によりけり御用心の事。

○南眞々部の行人漾よ、北にや細野のおかめ様

【解六十】 南安には眞々部の根裳行人の外、野澤の東方にも法心行人有り。其の行人塚なるものは今は平らげられ只小さなる社殿と鳥居を立つるに過ぎざるも是亦生塚なりしもの、如し。凡そ生塚にならうと云ふ人々の志は所謂衆生濟度に存りたるもあり又は不滅の名を企圖したるもあるであらう。が何れにしても、兎に角生き乍ら埋められて行く其れを又平氣（！）で葬り乍ら、時々地に耳を附けたりして「まだ鉦の音が聞える」とか「竹筒からお茶を垂らし込んでやれ」とか氣樂な事を云ひ合つて、尤もらしい顔附をして居た昔の人間の心持は今時の人には諒解しかねる。蕃奈の耳にでも入つたら少なくとも自殺幇助罪と來ねばなるまい。

○おらが白金三枚橋は、京や江戸にも有りはせぬ

○聞いてびつくり見て二度びくり、此れが白金三枚橋

【解六十一】 白金の三枚橋と云ふ其の白金は銀では無く只の地名に過ぎなかつたので聞かされたものが「なアーンの事だ莫迦〳〵しい」と云ふ昔話であるが、兎に角其處には短距離の間に三ケ所もの橋があつたので地名となつたのである。今穂高町の南字八軒屋に續く所で小學校の東方縣道上に二百乃至三百米突を距てゝ三ケ所、今は皆暗渠となり、却つて外の小堰等に石橋など架けられて居る。

○三味や太鼓につい浮かされて、固い心もうろうろして橋（豊科町にあり）

○春は宮城櫻の名所、夏は木崎湖舟遊び

○秋は登波離の紅葉の眺め、冬は佐野坂雪げしき

名木

○神代乍らの王子の櫻、枝に誠の花が咲く

【解六十二】 大町の縣社第一王子神社は垂仁天皇の御宇、仁品王此の地を領し伊邪那岐命を祀り給へるに始まり白鳳年中土民が仁品王御兄妹をも合祀、以後仁科領主累代の祈願所であつたが承久年間仁科盛遠に至り紀州熊野の本宮から（所謂熊野三所權現又は熊野三山とは本宮阿彌陀

如來、新宮藥師如來、那智如意輪觀音で、要するに佛教徒が日本の神樣を其等佛樣の垂迹と解釋したのである）若一王子の分靈を勸請してより今のやうな社號となつたのである。其の流鏑馬の神事所謂射手童も同時代からであると云ふ。境内の櫻並木もなか〳〵の老木である。

○日頃目に附く三本松も、櫻咲く時やよそに見る

○緣が遠けりやお詣りなされ、此處は下堀夫婦松

【解六十三】 三本松は一本の根元より三本の幹立ち又夫婦松は二本の幹相絡みて頗る奇觀、緣結びの願をかくるもの引きも切らず注連を張り小祠を祀りあり。共に烏川村下堀諏訪社境内に在り。

○乳川谷間のあのはゞ櫻、五月半ばに花が咲く

【解六十四】 大洞山の裏、乳川の谷に南、中、北の三つの平あり。其の中の平の巾（川の北岸）に老櫻一本（吉野櫻）即ち巾の櫻とて知られた名木であつたが往年山火事にて惜しくも燒けてしまつた。其の子木が遶りに幾本かあり過去の俤を殘して居る。其れより少し溯ればソリコバと云ふ所に彌助山の神あり。常盤村字西山の彌助、明治年間の人、間がな隙がな山に入りて其の開發に苦心し且つ此處に山の神を祀ると云ふ。其の邊りより乳川の北岸を見れば石南花夥しく咲く。また中の平を登りつめた所をテントキと云ひ北は布瀧の奇勝を以て有名なる明澤に連り西は乳川の最大支流なる釣魚澤に下る。晴れた日はテントキの頭にて富士を見る事が出來る（以

上松川村丸山鶴一氏談）。此等乳川沿岸の奇勝は總べて餓鬼登山路に沿つて居るのである。

○おらが下堀一本杉は、今ぢや軍用地圖に乘る

○わたしや代參たらの木樣へ、十月かゝさず月參り

【解六十五】 松川村板取の南方に在るたらの木は昔京都の或るお姫樣が落ちて來られ此所でお產の紐を解かれた。其の場所の目標として植えられたのが此の槵の樹で今のは二代目であると云ふが其れでも三抱へもある。安產を祈るもの絕えず。

○此處は二つ家傘松の、下で暫く雨やどり

【解六十六】 二つ家の傘松は平村駒澤大澤寺の西三町、鹿島と源汲への道の分岐點近くに在つたが大正六年舊八月十五日夜の岳嵐でむざんにも吹き倒されてしまつた。其の僅かに殘つた古株の傍に育てゝある二代目の若松高さ漸く一間餘、又此等の周圍には聊かの石の土留めを圍らし他より少しく高くしてある。其の名殘りの古株は煎じて飲ますれば小兒の夜泣を治するとて誰と無く削り去るにより今にも形無しに成り相である。

○谷の澁梨恨みは盡きぬ、なほも下れば侍女が澤

【解六十七】 天正十三年秀吉の軍勢に攻められ、姉小路入道休庵は飛驒國高山なる廣瀨城に據り嫡子秀綱は松倉城を守つた。松倉陷り秀綱等再擧を期して脫出、阿房峠を越えて信州に入つたが追手を避くべく道を分ち、秀綱は白骨より大野川へ、奧方は侍女と共に上高地より德本を越え、

鳥々に出でゝ會合すべく契つたが兩者ともに藤に遇つて果てられたるは慘し。卽ち奥方は鳥々谷にて姉小路家再興せば甘かれ然らざれば潔かれとて投げられた梨の實より生り出でたと云ふ一本の梨の古木、其の實今以て潔きが道の北側數間の林藪中に在り、また更らに東に下ること數町、奥方が楠の爲めに害せられたる時縛せられたりと云ふ楛の古株、侍女が害せられだと云ふ侍女ケ澤などあり。彼の奥方を害したる楠は忽疾となつて苦しみ死し其の族また之を疾むもの代々絶えずと云ふ。

名石　○尋ね來て見よ冠着山の、原に寢ねたる夫婦岩

【卷六十八】　東筑、更級二郡の境上に聳へ冠を着たやうな特兎有る米頭で善光寺平を行く旅客より好奇の眼を以て仰がれる冠着山は昔から歌枕の一つである。夫婦岩は其の山腹なる東筑更級郡村の分に在り、男岩女岩並び横はり頗る奇觀である。又少し距りて村上義清物見岩の有り更級郡の分にはボコ抱き岩と云ふのもある(以上東筑坂井村西澤勝氏より承る)。抑も昔は坂井村は近村と共に麻績の鄕として更級郡に入り又其處の安養寺の如きは信濃六大寺に數へられ定額寺の一て始めは矢張り此の冠着山中にあつたのだと云ふ。古歌に「わが心慰めかねつ更級やをばすて山に照る月を見て」(古今集詠み人知らず)のをばすて山は實に此の冠着山の古名であつた。因みに右の歌のをばすてから例の大和物語が一種の棄老傳說を作爲したのであつた。抑も古今、讀古今時代から歌詠みは皆足が弱くなつてしまつて實地踏査などは更に爲ず、語呂のよいやうな地名を拾つては好い加減な歌を詠んで何等良心に慙ぢぬのみならず所謂居乍らにして名所を

知るとて寧ろ鼻を高くして居た。さればこそ此の大和物語の作者なども「此の山の上より月いと明かく出でたるを見て詠める」などゝ前置し、又其の外の歌詠みも「姨捨山の高根より嵐を別けて出づる月かげ」だの「姨捨の山より出でし月」だのと云つて居るが實際に里から見て姨捨山(其の所在に就ては下の如く諸說あるも)月は寧ろ之に入るべくして決して月が之より出るやうな地勢では無いのである。其の頃の歌詠みは其う云ふ出鱈目屋であつたから右の詠み人知らずの歌なども別に深い意味が有つての事では無く單に姨捨山を月の名所とし其の明月を見てもなほ吾が心の憂ひは慰め能はぬと云ふだけの事と思はる。特に姨を捨てたの何のと云ふ具體的事實を問題としたわけではあるまい。或る人の藤したる如く姨を捨てた其の晩から姨捨山と云ふ名が出來て歌に詠み込まれたと云ふも確かに變である。或ひは其處は老人を棄てる習慣のある場所で其の男も其れに習つて捨てたのだから姨捨山の名は既に前からあつたのだと云ふら、其れなら爲捨山も無くてはなるまいと云つて笑つたと云ふ。兎に角棄老と云ふこと吾が國に無かりしや否は別問題とし此の山の名のをばすては姨捨など云ふよりも別に其の語原を考へねばならぬのである。をばすてはなばすたへにてすたへは葬地(黄泉)の事だから右の男は死んだ姨を葬地に常の如く葬つたのであるが孝心深いので其の山の方を見て哀悼して居たのである。卽ち棄老では無く單に死者を葬る山をなばすたへ山と云つたものだと云ふ說がある。矢張り其れならをちすたへ山も無ければなるまい。だから全然河岸を代へてヲバステはヲハツセで小長谷である。武烈天皇、皇子在さず、よつて御子代の民として御名の小長谷若雀命に因

み小長谷部を定め給ふた。ヲハツセは其れに關係ある地名であるとして今更級郡鹽崎村に小長谷山、長谷神社、長谷寺あり、又昔此の邊り、數ケ村を小谷の郷と云つたのは小長谷を二字に節約したので矢張り小谷、又は小谷と訓むべきであると云ふのである。此の說頗る有力である。しかし現今姨捨山一手販賣の如く心得て萬事然るべくやつて居るのは例の姨石と月見堂、桂の樹で有名な八幡村の長樂寺で、近世の名有る文人墨客は吾後れじと馳せ參じ、彼の簑の袖にも隱れ相な山田を一つ〳〵覗いて見ては田毎の月だなんて喜んで居るのである。抑も小長谷部また小谷の郷に關したなばすて山の名が冠着山から長樂寺の邊りまで移動したものとすれば地名の變遷なども餘程たわいの無いものと云はねばなるまい。

○此處は袖澤（北安廣津村）炭燒衆が、話相手の木靈石

○水に打たれちや又打ち返す、烏川邊の屛風岩

○馬羅尾（バロー）の大岩に褌（ふんどし）をさらし、忘れ果てたる鬼や馬鹿だ

【解六十九】馬羅尾の大岩は一名ふんどし岩と云はれ其の南面に白布を垂れたるが如き形現はる。此の邊り人が鬼と化りたる傳說あるにより此の歌が出來たのである（解百〇二、參照）

○須砂渡登れば岩原城趾、昔乍らの松の風

【解七十】岩原城趾は烏川の南岸に在り、北岸離山（はなれやま）と相對す。仁科の族岩原安藝守父子の居城、

天文中武田に亡ぼさる。又安藝守牌所は安樂寺であつたが維新後破却の厄を免れなかつた。

○松のふんぐり日雀（ひがら）がつゝく、此處は岩原城のあと

○此處は好いとこ盛親さへも、城を構へた小岩嶽

【解七十一】小岩嶽城趾は鄕土現存の城趾として規模宏大なるものゝ一と云ふべく、南安有明村の西の山裾に在り、一名割ケ嶽の城と云はれ、仁科の族盛親（小岩嶽圖書と云ふ）父子が之に據つた。今蹈査するに城の平（じやうたひら）は南北百五十歩、東西六十歩、其の背（すしろ）（西）の山に登ればなほ二三の小平地及び巨岩、岩窟等あり又山の間に水の手の小さき澤も有り、城の平の前方には幾重の濠の跡も見え、緩傾斜を以て東方の部落に下る。さて城の平の西南隅に太さ三、五米突に及ぶハクジの老木あり、其の下なる高さ一、四米突の岩の上に、笠石とも高さ〇、九米突の碑を安置す。碑面風化して僅かに正面に……大居士、右側に小岩嶽圖書公……、左側に永祿四……六月……等の數字を認め得るのみ。其處で此の城が武田に亡ぼされたる年に就ては異說が頗る多い。城主が穗高の問屋職井口帶刀に後事を托せる文書は天文十九年一月であるが其の落城は小谷五人衆田原文書では天文二十三年六月とされる由、妙法寺記では落城は天文二十一年、右城趾の碑や青原寺の位牌では永祿四年六月とありて信府統記や小岩嶽落城記の記載に倣ふものゝ如くである。斯くの如きは落城と落命と時を異にした爲めに區々の記錄を生んだのかとも考へられぬ事は無いが抑も永祿四年は謙信上洛、また川中島兩雄一騎討の大合戰の年で、なほ

小谷平倉までも落ちた弘治三年（？）より後五年に當る。其の頃まで此の割ケ嶽が少くとも落城せずに殘つて居たとは思はれぬ。吾等は井口文書や田原文書に據り天文十九年頃既に最後の覺悟が定められ二十二年頃兎に角城だけは落ちた事を信ぜんとする。隨て永祿四年六月と云ふ事は城主が隱れ長らへて居て其の時落命したと云ふやうな次第か或ひは寧ろ既に落命して居たに對し其の時公けに之を葬り碑も建てたと云ふやうな事に善意に（！）解して置きたい。一說に、信府統記が、甲陽軍鑑の、信玄約に背きて鰐が嶽城を攻めたる記事を當城の事と誤り記載したるより即ち永祿說を生じたりとあり、又當城一名割ケ嶽と云ふ事も右に伴れて鰐が嶽一名割が嶽と混同して生じたる誤ならんと云ふ、如何にや。

○耳が遠けりやお詣りなされ、安曇耳塚お塚樣

【解七十二】有明村字耳塚の田圃中なる大圓墳お塚樣は田村將軍が鬼どもの耳を切取り埋めた塚だと云ふ。之に祈れば耳の疾ひ一切に靈驗ありと。但し親の意見の聞えぬ耳には保證の限りで無い。

○白髮頭かぼう〳〵髯か、尾花首ふる爺ケ塚

【解七十三】鼠穴の北方尾花ほてらが風に招く所に古墳爺ケ塚がある。昔此の里に火の雨火の風が吹いた時以來此の塚穴に避難して命長らへた老爺があつた。其れ故爺ケ塚と云ふとなり。何れにせよぢいケ塚、障ケ塚などは塚の名としては殆ど全國的である。

○春の花岡山かげ行けば、櫻散り込む鬼の釜

【解七十四】北安池田町の東北なる山間に花岡鑛泉あり。又其の途中なる鬼の釜は丘陵の間に在る圓墳で南面し其の玄室の奥行四・五米突、幅員一・六米突、高さ二・五米突、側壁の石積は川原丸石を用ゐやゝせり出し式、別に二・五米突の羨道を附す、玆に注目すべきは玄室は羨道より遙かに低く其の境目には一米突弱（正さに三尺）の石積が爲しあり隨て玄室は前壁があるので竪穴式古墳と云はざるを得ず。彼の穗高神社の西なる上原古墳などゝ共に此の地方としては珍らしい構造であることを報告致し置く。

○森の鯛夕日に咽ぶ、木崎湖畔の城の趾

【解七十五】木崎湖西南岸なる仁科城趾は地名を森と云ふ如く今も其處には喪なほ暗き森があつて鯛が往事を追懷せしむべく秋の落日に咽び鳴いて居る。抑も此の城は昔は山田の館と云はれ武士勃興時代より戰國時代まで各仁科氏の據つた所で、幾多の英雄が興亡の跡を語るものである。先づ平維茂の裔清長、永承七年（異說有り）領家一條氏の讓を受けて之に據りたるに始まり承久三年盛遠に亡ぶるまで六代百七十年之を平姓前仁科氏とす。次ぎに阿部姓仁科氏は阿部晴明の裔と云はれ前の仁科盛遠の從士なる貞胤の子貞高、貞應元年鎌倉の眼代菅谷政治を森城に亡ぼし仁科庄を横領すること十一年間、次ぎに源姓（木曾）前仁科氏は義仲の第二子義重幼にして盛遠に賴り鬼無里の安吹屋に隱れ、天福元年出でゝ鎌倉に乞ふて貞高を森城に亡ぼす、

（此の時貞高の妻正さに姙めり、湖に投じて自害す、後世其處を横縁淵（はたをりぶち）と云ふと）。義重南原に館し（現今大町中學校の所）大いに商戸を集む、仁科大町の名之より始まる。建武中興の際仁科氏重、新田義貞に合して鎌倉を討ち、尊氏叛するや南朝を奉じ、興國二年宗良親王信濃に入り給ふや仁科貞重御身方に馳せ參じて常陸、上野、越後、越中等に轉戰し、又正平七年には新田義宗に黨し宗良親王を奉じて尊氏と武藏の小手差原に戰ふ。正平八年六月宗良親王を奉ずる香坂高宗等の大河原城危く貞重等國中の南朝方多く之に集るや守護小笠原政長仁科の虚に乘じ森、駒澤諸城を陷れ貞重の長子行重は越後に走り從士横瀬盛忠は作り降る。其の後行重再擧し盛忠と共に大河原を救ふこと再三なり、足利氏よりて先づ盛忠に喰はすに官位を以てす。文和二年行重病み時運非なるを慨し後事を盛忠の長子盛國に讓りて遂に卒す。一說に北山村足沼（今廣津村なり）に隱退、弘和三年沒すと。此の木曾姓仁科氏六世百四十四年、特に其の終り三世に亘り南朝の御爲めに一族の運命を堵して力鬪したりし事は殆ど彼の楠氏の如し。承久の事變に於ける平姓仁科盛遠の壯烈を知つて南北朝に於ける木曾姓仁科氏重、貞重、行重が歷世一貫の盡忠を解せざるもの多きは一恨事である。次ぎに平姓（横瀬）後仁科氏、維盛の裔と云へど其の世譜に到つては諸說一致せず。盛忠伊勢より來り仁科貞重に事へ其の女婿となる。長子盛國また仁科行重の女婿となり其の讓を受けて遂に仁科の主となる。南北兩朝合一の後、應永七年守護小笠原長秀に對する信州南朝黨の暴動、所謂四の宮、大塔の合戰には盛國の弟盛房武勇隱れ無く以後長く守護の節度に服せざりしが文明十二年八月仁科盛直、小笠原長朝の爲めに高

瀬川原に破られ和を請ひてより永く小笠原氏の强援を以て居り、武田の爲めに小笠原氏滅亡の際も容易に節を變するの色が無かつた。岩原、小岩嶽、青柳、日岐、平倉の各城主等皆其の支族である。天文二十一年十二月長時越後に走り中塔岡城となるや仁科盛康止むを得ず其の子盛政と共に武田に降る。永錄四年五月七日盛政川中島の陣中に於て信玄の嫌疑を蒙り死を命ぜられ、嗣子孫三郎は森城に在りて之を聞き湖に投じ、平姓（横瀬）後仁科氏玆に亡ぶ。正平八年盛忠森城主となりてより九世十代二百八年、其の間代々穗高神社、宮本神明宮、若一王子神社等を修覆し奉りし事は其の功沒すべからず。終りに源姓（武田）後仁科氏は信玄、仁科土民の離反を恐れ其の五子晴清を仁科盛信（信盛は誤と云ふ）と名乘らしめ以て仁科の名跡を襲がしめたるもの、盛信は後に伊那高遠城で織田氏の攻むる所となり壯烈なる戰死を爲した。以上各仁科氏の居館は時々變動も有つたが其の牙城としての森城の價値は動く事は無かつたので隨て其の落城する度び必ず悲劇が繰返され幾多の傳說が殘された事を回顧すれば遊子をして轉た斷腸の思ひ有らしむ。

○日岐（ひき）の城あと昔のまゝに、月は照れども草の原

【解七十六】昔日岐（ひき）（又は日置（ひき））と云つたのは今の東筑生坂（いくさか）村と北安陸鄕（りくにつ）村の一部とに亘り犀川の兩岸に跨つた地域であつたが今の日岐は犀川の西、陸鄕村の一部だけで尾根一つ界として平日岐、裏日岐に分れて居るのである。さて大永の頃仁科明盛（盛直の弟）の二男盛慶（母は小笠原長朝の女）小笠原長時の客將として勇名比無し。日岐丸山（今犀川の東岸、東筑生坂村）

の城主となり丸山肥後守と號し又北山村平出（犀川の西、今廣津村）に成就院を開基す。其の子兵庫盛高また長時を援け孤立無援の中塔城に屢々糧米を送る。天文二十一年十月甲將馬場民部日岐城を陷れ盛高死す。同十二月長時去つて中塔城武出に降る。天正十年七月小笠原貞慶深志を復するや盛高の子丹波召に應ぜず貞慶來り攻めて城陷り翌年和成り、丹波の弟肥後に到りて亡ぶ。以上丸山氏が據りたる日岐城の所在に就ては諸書の記載何れも多少判明を缺く所ありと雖も凡そ本城即ち日岐丸山城の跡として下生坂の大城山、居館趾として其の西麓、万平の小丘上なる殿屋敷と云ふ所及び其の下なる馬場と云ふ所、なほ支城として犀川の西なる臨郷村平日岐即ち今同村役場の西北なる城址を擧げ得る。茲に掲出せざる歌詞は最後に記せる平日岐の城址を詠んだのであるが右本城と見られて居る大城山は又王城山とも記され犀川の東　里に屹立し南は恐ろしい鐵尾根を以て經ケ藏と云ふ嶮山に連る（クラは高き所を意味し、庫、鞍、倉等あり又山をもクラと云ふ。南安小谷村は小山村で室山の地形に因むべく小谷の平倉の倉も山を意味するであらう）。經ケ藏の南の尾根頭から西へ下る之も恐ろしい痩尾根があつて万平の殿屋敷に連るのである。又大城の北はだら〳〵下りに下生坂へ下り此の方はやゝ人數を以て上下する事が出來る。外には登るべき道は更に無い。頂上なる本城の平と云ふもの、昔は知らず今は小屋一つ二つ建てる程の空地一か無い。水の手なども涸れたるにや今は見當らず。其れでも南は絶嶺、東は大澤、仁科四十八城中第一の要害と云はれた値打は十分に認められ、西は犀川を越えて安曇の山々、東は北信の千山萬岳を望み、眺望頗る雄大である。なほ此の大城や經ケ藏

の東の谷底に丸山其の他の部落が見える。日岐城主が丸山を號したのは此の地名に由來するであらう。万平の小丘上なる殿屋敷もなか〳〵の要害で此れだけでも大敵が支へられると思はれる。頂上の平約百坪、南と東とに斷崖直ちに犀川に迫り西と北とみ平地に下る。西の平地に所謂万平の馬場あり、今に殘る素晴らしい老松の並木、以前は鍵の手に連り在りしもの其の一割を伐り盡して今は道に添へる一劃のみ殘れりと（万平の人吉澤波治氏現場にての談）。しかもなほ殘る老松數百本の見事さは史蹟としても名勝としても保存さるべき十分の資格があると吾等素人眼には思へるのである。好古の人士其の地に遊ばゞ恐らく吾等の言の誤らざるを知られるであらう。

○中谷玉泉寺お墓の邊り、桂落葉に時雨降る

【解七十七】　飯森日向守泰盛は仁科盛朧の子で盛能や青柳清長の弟、又日岐丸山城慶の甥に當る。疾風枯葉を捲くが如き武田氏の侵略に對抗して事志と違ひ弘治元年泰盛飯山城を捨てゝ越後に走り越て三年潜かに歸り小谷五人衆を說く（五人衆とは田原主馬、太田土佐之丞、山田左近、山岸豊後、細野織部である。後年に至り武田氏は山岸豊後に代ふるに横澤佐渡を以てした）。山岸豊後先づ應ず、田原主馬聽かず變を甲州の眼代山縣昌景に報ず、昌景等を罰して來り泰盛を平倉城に攻む。拔く能はず、夏再び來り攻め七月九日城遂に陷り泰盛討たる。平倉山の東なる中谷の玉泉寺は泰盛開基にして又其の埋骨の地である。寺庭に桂の大樹有り。又泰盛の墓は其の裏山半町程に在り、碑銘に曰く、實降院殿當寺開基傑山成榮大居士、弘治二丙辰年二月初二

烏、平朝臣俊森日向寺春盛と。但し之は文化十三年當寺十二代來鳳再立であつて其の最初の碑も傍らに在り、折れ損じ且つ碑面の風化甚し、須らく寺内に藏すべきであらう。なほ此の墓の下の段に田原主馬はじめ其の一門の墓、又太田一門の墓あり。所謂小谷の人衆は明治三十一年二月計七人を以て士族に列せられたのであつたが其の中にて土谷（つちや）（中土村（なかづら）は中谷（なかや）と土谷（つちや）と兩部落より成る）より出でたる小谷温泉湯元の山田氏など今もなほ社會に知られて居る。さて春盛戰死を弘治二年二月とするは此の碑銘や玉泉寺位牌に基く土地の傳へであるが諸多の文書に徴し弘治三年七月が信ぜらる。彼の割ケ嶽落城の例の如く其等が往々史實と一致せざるは奇怪の感無きにあらざるも戰亂惶忽の世、武田信玄の如きさへ三年其の喪を秘せしめたる例もあり、況して討滅せられたるものゝ碑などが眞直ぐに建てられやう筈は無く、彼の湊川なる楠公自害の地さへ正確には解らず、水戸黄門公の苦心あるまでは卒塔婆一つ立てられては無かつた事を見ても察すべきであらう。翻つて思ふ近來敬神崇祖の聲漸く盛なるが、元來鄕土の英雄は是れ鄕土人が共同の祖先である。須く其の史實を明確にし其の墳墓の地等力めて顯揚すべきものなると同時に其の直裔たる人々も亦社會に處して祖先に恥ぢざるの貢獻あらんことを望むや切なり。

五、名　産

水電

○下々の下國の山國なれど、安曇や電氣で花が咲く

○晴れの都で花咲く電氣、もとは安曇の谷間から

有明山蠶（やまこ）

○光る主さの兵兒帶を見れば、光る筈だよやまこ入れ

【解七十八】天蠶（てんさん）は約百年前、七村（しちむら）（松川組のうち中房川以南の七個を云つた。今の南安有明村である）の森島長七、曾根原武左衛門、寺畑馬十、矢ノ口十三郎等野生蠶より採種せるに始まると云ひ、柞蠶（さくさん）は明治十三年同村曾根原林三、茨城（いばらき）の野つ子を移種せるより起ると云ふ。近年天蠶には蟹蛆の害あり、其の區域だけは數年間打擊を受くるわけなるも廣い高原を次ぎ〳〵と新しき天蠶林に仕立てるので前途無限の盛運が豫想される。凡そやまこ糸は品質、光澤等全然絹糸などの及ぶ所にあらず實に安曇高原唯一の特産物で近頃は又飛行機の翼を張るなどにも用ゐられると聞く。

○光る羽織の糸入れ縞は、安曇野に飼ふやまこ糸

○信州安曇野、蠶の本場、山の木にまで繭が實る

○娘揃ふて菅笠たすき、唄でやまこの種はなす

○青野眺めてやまこ屋住居、唄でやまこの番をする

○晝寢するならあの山蠶小屋（やまこごや）で、啼（な）くよ霍公鳥（くわくこうどり）を聽き乍ら

○やまこ番小屋隱居の晝寢、鳶（とうび）やまこを捕りに來る

○安曇天嶺有明原の、木の間隠れに咲く黄金
○思案有明やまこに惚れて、うんと背負込む札の束

穂高わさび

○安曇名産穂高の山葵、黄金白金砂に湧く

【解七十九】穂高山葵は品質産額ともに漸く静岡山葵の壘に迫らんとしつゝあり、但し価格暴落等の際には商賣柄として辛い目を見た山葵屋さんもあつたとはきいて涙の出る話。

○昔や荒地のあの葭蘆も、今は山葵で花が咲く。
○穂高わさびと千代萩は、きいて涙がぽろり出る
○一と夜穂高のわさびとなりて、京の小町を泣かせたや
○いきな山葵についつまされて、辛いうき世で苦勞する
○安曇名物數々あれど、泣いてほめるは山葵ばか

青木花見の鯉

○小石〳〵で育ちし山葵、末は青木花見鯉のつま
○戀に焦れて青木花見通ひ、こひはこひだが池の鯉

松川みかげ石

○わたしや松川みかげの石よ、固い上にも石固い
○固い約束わしや花崗石、萬却末代變りやせぬ
○松川名物お米とお蕎麥、神戸原なる花崗石

名いろ〳〵物

○忘れまいぞや松川どまり、月の好い頃蕎麥の頃
○秋になる度び松川村を、思ひ出します蕎麥の味
○色は黒くも愛嬌は無くも、人に好かるゝ松川蕎麥
○音に聞ゆる松川蕎麥の、前の蒸畑、松線

【解八十】土俗「蕎麥前の熱燗」と號し冷めたい蕎麥を喰ふ前に熱い燗酒をぎゅーつと呑む。松線は松川村で出來る酒の名、また矢ぎの歌なる菊川、玉川、男山は何れも其の隣りの池田町で出來る酒の名。

○池田通れば白壁見ゆる、あれは菊川あれは玉川、男山

【解八十一】此の歌の唄ひ方は【解八十二】を參照すべし。

○牧ぢや大根、栗尾のお寺、チヤシで知られた離山
○秋の牧原畑の中で、大根こぎ〳〵高話

○牧の娘のきりやうに見惚れ、大根わすれてから戻り

○小倉大根と牧大根は、種は一つで味や違ふ

○餘り大根は只でもよいと、馬でつけ出す牧の原

◉神田南瓜に岩岡大根、瓜は寺所菜は淺間

○わしが丹誠の板取蓑を、召すは何處の何んな殿御か顔見たや

【解八十二】 此の樣な歌は下の句が複雜して居る。即ち「何んな殿御か」だけが餘分である。隨て普通ならば「召すは何處の」を繰返して二度唄ふのであるが此の歌詞の如きものは其れを繰返へさず、即ち二度目には直ちに「何んな殿御か」へ移つてしまふのである。隨つて音譜は普通の歌詞の場合と異る所無し。

○おらが鎧は板取蓑だ、雨よ矢の樣に降らば降れ

○ほんに重寶だ板取蓑は、古くなりや又田の案山子

○夏の盛りに大町行けば、冬を賣り出す氷餅

○嬉し耻し大町林檎、赤い顔して主を待つ

○主を待ち〳〵大町林檎、色に出でたよ赤い顔

【解八十三】 大町林檎は大町及び隣村常盤村に產する。他の產地の物には到底見る能はざる風味と水分とを有つて居ること蓋し地質や氣候の然らしむる所であらうと云はれ、文字通りの特產物として近年非常の聲價を謳はるゝに到つた。

○あの子見染めて會染(地名)行けば、たすききりゝと、袖も引かせず乾瓢ひく

○鍬を頭の上まで擧げて、起す美麻(地名)の麻畑

○小谷四ケ庄は女子も好いが、馬の好いのに又惚れる

○青い山から立つ白烟、あれは中村(陸鄕村)瓦燒き

○下手な顔して中村通りや、小口瓦の型に採る

○瓦燒く衆は恐ろしものよ、鬼の頭を燒いて食ふ

○わたしや三鱗煉炭育ち、色は黑くも熱で來い

【解八十四】 三鉾石炭會社の煉炭は全日本に於ける斯界の覇王で、安曇地方だけの産物と云ふやうな狭い話とは譯が違ふ。然かし其の社の事業をして今日の大を成さしめたる專務湯口昌氏が此の郷土の出身である事に於て、三鉾煉炭其のものと郷土安曇とが切つても切れぬ深い仲であると、三鉾の方では知らずに居るとしても郷土人の方で其う決め込んで居るのである。沂年湯口氏の薫陶により成功の途上に在る青年頗る多く、其の人々相結んで商道團と云ふを組織し專ら士魂商才の涵養に力めつゝありと云ふ。思ふに剛健其のものと云ふべき湯口氏の如きは浮沈常無き當今の實業界には全く得易からざるの人、隨て氏自ら更に偉大なる運命を開拓せられるのも恐らく近き將來であらうと信ぜらる。

○昔乍らの宮本紙は、色は黒くも地が強い
○紙を漉く子の小唄を聞けば、わしが思ひは水の泡

○春の風吹きやお饅頭はしやぎ、二割損するおかめ町
○おかめ町にて賣る饅頭は、兎角若い衆が買ひたがる
○年寄りや新橋飴呑みおいで、飴を呑むのにや歯はいらぬ
○登る德本峠の茶屋に、名さへ元氣な力餅

○夏のみやげにやりたや京へ、木崎湖の風、岳の雪

○松川から出た安曇の踊、旅や他國で今盛り
○安曇踊を汽車へと乘せて、花の都へ上らせる

六、敬神

神社

○穂高明神飾りが上手、仁科神明舞ひ上手
○穂高森から夕燒空へ、啼いて舞ひ立つ五位の鷺
○鳴らす柏手神代杉の、音に響いた神明様
○池田八幡軍の神よ、仁科神明作の神
◎神戸原なる權現様は、安曇踊の守り神
○松や槍の梢がとちて、月も漏れないおたね様

【解八十五】 烏川の支流小野澤の畔に一泉有り。傍に小祠を祀る。おたね様と云ふ。此の水能く眼病を癒やし又味噌の味を治すとあり、なほ祠邊に菊御紋章を刻したる石等あり、高貴の方の隱棲地かと云はれゝ。

○細野船方年中霞む、香の烟りのおかめ様
○一二三稲荷へ行く時やよいが、歸る時にはうろて橋

寺院

○彼の世此の世の話でのぼる、佛迎への滿願寺

【俳八十六】 盆の九日には佛を迎へると稱して誰も彼も西穗高村の山の中なる栗尾山滿願寺へ參詣しお籠りをする慣はしがあるので寺はとても大賑ひである。何にせよ十萬億土から飛んで來る此の郷土の佛たちは其の家々の墓へ來る前に各々の政黨、政派では無い宗門宗派を超越して全部栗尾へ着陸、其處で大和尙が讀み上げる歡迎文を聞き乍ら圓遊會のどんちやん騒ぎで一と晩明かし、翌朝其れ〳〵迎ひに來て居る婆婆の孫や子にまーんこ（背に負はるゝこと）して其の家々へやつて來るのだとあるから何の事は無い西方淨土と安曇平との交通貿易は此の栗尾一ケ寺の專賣特許なのである。何の時代から始まつたかは知らぬが兎に角栗尾には頭のいい和尙樣が居つたに違ひ無い。

○圖無し草鞋が山ほどあがる、彼れは栗尾の二王門
○首も無いのに兩手を合せ、首を栗尾の地藏樣
○石の段々幾つかのぼり、峯は栗尾の奥の院

○栗尾の地藏さま頭がでかい、牧の娘は目がでかい

◎十九大厄姓むか死ぬか、詣れ牛伏寺觀世音

○上野（眞光寺）米澤（壽村）お庚申樣へ、還い小谷や四ケ庄から
○梅に鶯日ねもす啼いて、春も長尾（溫村）の平福寺

【俳八十七】 昔は靈の森とて見事な森に圍まれ梅も有りたれど明治廢佛後は觀音堂一つ殘るだけ

○石の地藏さま片足痛め、道に寢て居る安樂寺
○明日も天氣か暮れ撞く鐘の、音が好いぞえ法藏寺
○蓮の臺に法の燈捧げ、慈悲を松尾の藥師堂
○花の御堂に慈悲の燈揺れる、名さへ尊き佛崎
○牛の鳴くよなサイレンよりも、いきな彈誓寺の時の鐘
○高いとこだよ靈松寺山は、安曇平を一と眺め
○大穴藥師へ日傘が續く、若衆あとから又續く
○蟬の聲さへ暑くは聞かぬ、水の音添ふ泉福寺

【解八十八】 陸郷村大穴山泉福寺、本尊は薬師如来なり。廣津村平出の成就院と共に安養の東山中に有名の古刹である。

○南原なる六角堂は、上は三角下四角

○三十三番仁科の札所、詣れ大町南原。

【解八十九】 観音様巡拝、仁科三十三の札所は一番大町王子今の若一王子神社に始まつて三十二番佛崎、三十三番此の大町南原の六角堂に納まる。何の札所にも例の巡礼歌があるので大町のうちで云へば「二十七番弘誓寺のは「渡る海深き誓ひのあまねさにたのみをかくる法の船かな」三十三番六角堂「めぐり來し御寺も三十路三なみ原千草の罪も露と消えなん」である。仁科札所の範圍は佐野坂以北に及ばず、今日の大町、平、八坂、社、廣津、池田、松川、常盤の諸村である。先づ大町にて、王子、みやうき庵、靈松寺、天正院、禮誉寺、六角堂、三ケ村せきゆう庵、たいねん寺（今無し）大原西岸寺（元は大町八日町に在りたり）六日町青龍寺等、次ぎに平村にて借馬かいがく院、駒澤大澤寺、大出さいしやう院、海の口かいこう庵、次ぎに八坂村にて覺音寺、社村にて松崎の瑠璃光薬師堂、曾根原淨蓮寺、常光寺、丹生子の淨珍寺、廣津村にて平出の成就院、池田町にて淨念寺、松川村にて北和田觀勝院（今無し）反川蓮淨寺、町屋觀音堂、常盤村にて佛崎觀音堂、清水の清水寺等すべて其處の本尊の佛様たるに係らず觀世音菩薩が在す所を巡禮したのである（仁科三十三の札所は六角堂住職様の御話）。斯くの如く巡

禮は大低三十三所の觀音様を廻る慣ひであるが、外の佛様や神様を廻ることも無きにあらず、仁科巡禮のやうに小規模なのは信州のうちには川西巡禮あり、即ち例の栗尾が川西一番で續ねて信濃二十六番の札所である。又大規模なのになると秩父、坂東、西國、四國など吾等の祖先も信仰心の篤いものは巡拜して廻つたものである。現代に於てもお伊勢様や豊川稻荷等へ年番を定めて代參と云ふ事が行はれて居る所もあるが、此の種の行事は大いに郷土的に復興し、講を結び季節を定めて年々神佛を巡拜すること、彼の白衣登山の信仰者衆のやうに致したい。殊に郷土的な小規模の札所めぐりは近頃流行のハイキングと共に大いに盛んにしたいものでは無いか。

○此の世乍らの極樂淨土、月の夜櫻貞鱗寺

【解九十】 神城村澤渡の貞鱗寺は弘治二年澤渡盛方（仁科盛政の弟）の母貞鱗尼の開基、寺庭の糸櫻、枝垂れにて花は赤味あり、樹幹太さ目通りにて一丈五尺、高さ五丈三尺、地上約二間の所にて五本ほどに分岐し枝張り七十五尺ありと寺男さんの説明である。花時には遠近よりの遊覽者で雜沓を極める。

次手に記す。此の貞鱗寺の數町南方に発春院あり昔は東德寺と云ふ、庭に今二抱へほどの銀杏樹立てり。又約半里東方なる東佐野に地藏堂と云ふ〻やかなる堂あり、此の二つが西行上人撰集抄に「永暦のすゑは月の頃信濃國佐野のわたりを過ぎ侍りしに一庵を結び居たる二人の僧あり一眠れる如く終りを取れり」云々の二僧庵であると云ふ事になつて居るが、信濃地名考

ても、高井郡田中の湯の南なる佐野か大町の北の佐野か何れにも二僧の墓ありて眞偽知り難き由記し居り、のみならず西行法師其の人も名代の歌詠み（！）であるから何を書いて置いたか解ったもので無い。と云ふのは中世の所謂歌詠みは居乍らにして諸國を巡り侍る事能因法師白河の關と云ふ古い手もある次第なれば、謂はゞ美文作例集と云ったやうな撰集抄などをあてにして、本氣になって佐野の引張り合ひをするなど、寧ろナンセンスなるべく、西行が地下で舌を出して居はせぬか。

○峯の藥師は尻つみ藥師、つまれ〳〵てのぼり行く

【解九十一】尻つみ祭と云ふ事諸國に在り、東筑坂井村の尻抓藥師樣も其の一つである。吾が好しと思ふものゝ尻を抓んで親愛の情を通ずるは原始時代からの事であらうが抓んだ責任を他へ轉嫁せんとする場合、其處の祭神が美女の尻を抓み給ふたのであると云ふやうな奇妙な傳説も生れて來るのであった。

○千早振る代の姿を見する、穗高祭の飾り物

○穗高祭にや岩山かざる、並ぶ杉の木蚊帳かけて

○安曇名の出た王子の祭、馬に射手實乘り廻す（解六十二參照）

○語り傳へて昔のまゝに、熊野權現臼祭

【解九十二】中萱嘉助（解百〇一、參照）の先代某其の村の鎭守の爲めに熊野に詣で再度の分靈を勸請して來たが生憎社殿未だ完成せず、時しも十五夜餅搗き後なりしを以て假りに白の上に安置し率り社殿成るを待って率還したと云ふ。よって例祭には氏子の人々幾を搗ぎ太鼓を鳴らし乍ら其の家の臺所なる臼を廻りて後お宮に來りお符領となる。嘉助所刑後も此の風習は殘つて居たが維新後廢したと云ふ。

○春は下堀おいッとしよ祭り、髷や島田に散る櫻

【解九十三】昔烏川村下堀の若い衆が其のお祭に鄕倉からお宮まで舞臺を曳くのに道の曲り角毎に梃子を用ゐ「はアよいッとしよ、こらおいッとしよ」と掛聲したものであると云ふ。祭日は四月二十日で櫻の季節、婦女子の行樂には誂へ向き。

◎さゝらほうさら出塚（烏川村）の祭、粟の强飯アのどつまる

【解九十四】此の歌詞の上の句は鄕土の俚言として著明なもの、すべて御粗末なる事の喩へに用ゐられる。又「さゝらほうさら」又は「さゝほうせ」など云ふは佛敎徒が菩薩の略字として其の紳冠だけを取り「ササ」と記した事から一般に略式の事を「ササ菩薩」と云ひ慣はしたるに始まると云ふ事である。

○須砂渡山の神類無い祭、裸はだしで舟擔ぐ

○芝を擔いでお符禮渡す、梓八景山芝祭

【解九十五】 梓村鯰山の諏訪社の祭禮には芝を搶いで社殿の周圍を驅け廻つたと云ふが今は芝は繩に代へられたる由。

信仰

○破れ窓から兩手を合せ、をがむ三日月主の爲
○鎌で切るよな三日月樣へ、思ひ切れずに願かける
○今は丑滿草木も眠る、かける大願主の爲
○さても恐ろし丑滿時に、藁の人形に五寸釘
○ばかな願ひは佛も聞かぬ、措いて栗尾の滿願寺
○如何な大原(大町に在り)お庚申樣も、無理な願ひはかのえざる

○たよる神樣あの四つ辻で、四方に取り持つさへの神
○手鍋さげても連添ひたいと、お多賀樣(解六十三參照、下)(堰夫婦松の小祠)へと月參り
○いきな姿で幟をかつぎ、おかめ樣へと禮詣り
◉誠積もれば祈らずとても、神は頭に宿らしやる

七、歷史

民間傳說

○安曇平は神代の昔、深きえにしの海のあと
○水を治めて高瀦の畔、今もまします佛崎

【解九十六】 景行天皇十二年の事と云ふが幼名日光丸、長じて泉小太郎と云つた宛ら中世紀の武士のやうな名の神樣(或ひは佛樣か)が犀龍王と云ふ其の母神と共に安曇湖の水を北海に落す事に成功せられたのだと云ふ。又曰く小太郎は其の後川會に住し其の子孫・兄は筑摩太郎、弟は安曇次郎で世々其の地の領主たり。なほ小太郎の隱れ去りたるが今北安なる當麻村佛崎の山腹に在る岩穴で之を祀るのが其の山下なる觀音樣であると云ふ。所謂泉小太郎治水は穗高見命の御事蹟を申し、景行天皇十二年とは川會神社創建の年を意味するものと史家は考へて居る。

○花の宮城昔を問へば、ギシキ籠りし鬼の村
○鬼の籠りしあの宮城へ、今ぢや來て住む都人
○松尾山鳥女に化けて、恩の報いに羽を置く

【解九十七】 昔矢村(今有明村の內)の矢助なるもの山鳥の、捕はれたるを哀み獵師に乞ふて之を放つ。其の夜、山鳥美女と化し來つて矢助の母に孝養を盡し遂に矢助の妻となる。田村將軍神託により鬼賊退治の征矢に劔ぐべく十三節の山鳥の尾羽を求む。矢助の妻何れよりか得て之

を矢助に與へ、再び山鳥となつて飛び去ると云ふ。矢助は其の羽を獻じて莫大の恩賞に預り其の名も矢助と改め村も矢村と呼ぶことになつたと云ふ。又松尾は矢村の續きで有名な藥師堂あり田村將軍創立と傳へらる（田村將軍鬼賊退治は序文をも參照）。

○安曇電氣の消えたる夜半は、牧のお小僧火唯一つ

○晴れぬ怨みか幾代の後に、殘る栗尾のお小僧火

【解九十八】　昔栗尾滿願寺のお小僧、證明の油買ひに每晩遠い所まで遣られた。或る時歸りに時間で過つて其の油をこぼしてしまつた。和尙苛責して遂に責め殺す。其の後小僧の怨念去らず、其の油をこぼした所で每夜火をともし今以て變らず、栗尾のお小僧火卽ち是也と。穗高町邊より見ると其の火は栗尾より里への下り口、牧の荒神堂の邊とも云ふ。とぼ〳〵歩くやうな一點の薄赤い火、其の實體を突き止めやうとしたものは昔から少なくなかつたが更らに要領を得ず。今でも安曇電氣發電所の何かの故障等で此の里が一帶に闇となる時があつてもお小僧火一つは相も變らずとぼ〳〵やつて居ること奇の奇、怪の怪。

○穗高二本松物草太郎、遠き昔の夢の跡

【解八十九】　物臭太郎の昔話は桃太郎やかちかち山の如く全國的であるが、物臭太郎物語の出來る以前から斯うした語り草があつたものか、又は作者が印度や支那から渡來の空想などに暗示を得て作爲したと云ふやうな事か、何れにせよをたか（穗高か）の大明神だの筑摩の郡あたらしの鄕だのとあつて此の鄕土を題材に採つてあるので、日本風土記、地名考、信濃奇勝錄などでも色々と考證せられ、物臭太郎と穗高神社とは離れられないもの、隨て社後の字二本松（此の松今は枯れて殆ど跡無し）に在る塚は物臭太郎の塚であるなど云はれて居るが、兎に角あのやうな物語も何等か此の鄕土の史實に據つたもので無いとも云はれまい。

○鄕馬散り込む室山くぼの、太良法師の足の跡

○見れば見るほど實ずでかい、太良法師の火打石

【解百】　南安倭村岩岡社、祭神は建御名方命と瀨織津姬命とであるが元來は落ちたぎつ速川の瀨に在すてふ後の一神を祀れるものと考へられる。卽ち此の社祭禮には數町を隔てたる梓川原に矮岩明神とて亙岩上に一祠（岩岡社の奥の院）瀨織津姬命を祀るあり、此れにて雹・祭事を行ふを例として居るからである。又此の亙岩は太良法師の火打石であると云はれ、其の根は梓川の南岸なる東筑新村の岩崎明神まで十町も讓いて居ると傳へられて居る。岩岡、岩崎等の名稱も右の如き地形に關係あるべく、要するに此等も梓川の砂礫に埋め殘された岩脈であらう。さればこそ矮岩も其の岩根近年大いに埋まり露出部が甚だ僅かになつて居る。

○嘉助〳〵と末代までも、安曇百姓の守り神

○人は一代名は末代に、朽ちぬ嘉助の逆さ杉

○嘉助にらめば念力徹り、お城かしがる其の日から

【解百〇一】貞享義民中萱の嘉助、及び之と行動を共にしたる人々の壯烈に就ては吾等郷土人が末代まで肝に銘する次第であるが、遠く今の北安に及びても松川組久保田佐治兵衛、池田組中島勘十郎、眞島半兵衛等其の百姓衆と共に所謂お訴訟に參加し、又松川組耳塚村（今南安有明村に入る）草間三郎治は追放に處せられて居る。凡そ此等前後の史實に就ては既に江湖に明なれば喋々せず。嘉助一度び歸宅したる時、突きたる杖其のまゝ根附きたりと云ふ所謂杖立傳說の逆さ杉は、明盛村中萱なる熊野神社境内に在り。今は枯れて古株殘るのみなれど注連を圍らし又傍に二代目の若杉敷本を植えたり。思ひ起す貞享三年十一月二十二日、所謂一揆の首領等は其の家族と共に勢高、出川二ケ所で所刑されたが、嘉助の將さに刑せられんとするや、大眼を見開き群衆に對つて拶挨を爲し、終りに五分摺り二斗五升の主張は死しての後も斷じて枉げずと絶叫しつゝお城の方をはつたと睨んだ、其の時傾いたのだと云ふ松本城天主閣も、前松本中學校長小林有也先生の盡力により保存會成立、傾斜も直り修破も出來て今より三十年前漸く其の美觀を取戻したのであつた。

○天狗岩からさらばの聲で、鬼となりたる信太郎

○久兵衛新田三年の稔り、信が名殘りの忍び作

○里を背にして深山に對ふ、あれは馬羅尾の信の宮

【解百〇二】昔池田組が今の松川村馬羅尾山に入會權を有つて居た頃、池田組の内林中村に久兵

衛と云ふ大百姓があつた（今も字久兵衛分と云ふ隨分廣い地籍がある。昔は澁田見の内であつたが明治から林中の内となつたと云ふ。然らば澁田見村の久兵衛と云ふべきが如きも、久兵衛分は澁田見で、久兵衛其の人は林中の百姓か）其の伜信太郎、或る年、友だちと馬に乘つて馬羅尾へ悠刈りに登つたが突然馬の背から其處の天狗岩と云ふ大岩へ飛び移ると共に雲に届くやうな巨人となり山から山へ跨つて「さらばよう、さらばよう、さらばよう」と三度呼んだまゝ行方知れずになつて仕舞つた。友だちは一同蒼くなつて其のまゝ里へ逃げ下つて來た。其の後久兵衛の田畑は三年間と云ふもの、何者とも知れず春は一夜に仕付け、秋は一夜に收穫して呉れるものがあつた。恐らく鬼になつた信太郎の仕業であつたらうと云ふので馬羅尾の入口に一祠を祀つたのが、古來一の澤の畔に鎭りましたよしごやの山の神樣と向き合ふ所の埴澤の山の神即ち信の宮で、此の宮のみは里に對はず山に對つて居る。又其の年々の祭は昔は池田組の内、花見、瀧澤、林中、澁田見、池田の五ケで執り行つたが維新後林中だけとなつたと云ふ（久兵衛分及び信の宮の祭祀の變遷等會染村にて石川祐一郎先生より承る）。今、久兵衛の後は詳かならず、小岩原太一、赤羽東逸など云ふ人々其の裔かと云はれる。馬羅尾には巨人傳說なほ一つあり。昔澁田見の或る男、馬羅尾にて日暮れて只獨り、重い荷を拵へ過ぎて背負つたはよいが立ち上がる能はず、深山の事とてあたりは段々物凄くもなり獨り言で愚痴を云つて居ると、恐ろしい地響きと共に誰か背ろへ來たものがあり「此んなものが重いか、其れ立て」と云つてひよいと起して呉れた。お蔭で背中の荷は輕きこと有れども無きが如く、しかし恐ろしさに後

ろも見ず飛ぶが如く家に歸つて來て其れなり大熱が出て長いこと病んだと云ふ（池田町薄井小藤太氏談）

○童泣かせに夕陽が消える、急げ山人山下り（解五十、參照）

○天狗原山天狗の田植、唯の一夜のたとへぐさ

【解百〇三】天狗原山は小谷温泉の奥に在り。上に沼あり、五六月の交、一夜にして全面に奇草を生ずる恰も田を植えたるが如し、之を天狗の田植と云ふとなり。

○靜御前の昔を忍ぶ、此處は大鹽見えぬ原

○尋ねごされよ靜の櫻、花の舞姫立てた杖

【解百〇四】靜御前が義經の後とを慕ひ奥州違ひで今の美麻村大鹽（オーシュー）へやつて來た。入坂村から美麻村へ入る所に見えぬ原（又はミエノ原）と云ふ所がある。奥州はまだ見えぬと歎いた所であると云ひ、又大鹽へ着した時奥州で無く大鹽であることを聞き、杖を立てゝ慟哭した、其の杖に根を生じたのが今大鹽の南方藥師堂と云ふ地籍に在る所謂「靜の櫻」であると云ふ。此の外、靜や其の母磯野禪師の墓と云ふもの、又は靜の杖で此の外にも銀杏の大木と云ふやうなものも近村に在る。靜が此の地方へ來たなど勿論史實で無いとしても、斯かる傳說の散

在する事は面白く、或ひは何等か斯うした美人徘徊の史實が有つたのかも知れぬ。さて右の靜の櫻なるものは大鹽部落に臨んだ南方の臺地上なる畑の中に在つて、高さ七丈餘、太さ目通りにて三丈、樹幹直立、枝張り見事、樹種は犬櫻、樹齡約千年と云はれ、頂きの所の梢に多少の枯れは見せて居るが樹勢なほ盛んである。花期は寒地の事とて六月に入ると云ふ。樹の下まで路を開けたり附近の商店で繪ハガキでも賣つたら探勝者に便利を與へるであらう。

○上籠山姥、石座の跡を、問へば應へる閑古鳥

【解百〇五】閑古鳥は郭公鳥に同じ。呼子鳥またツヽドリ、フヽドリとも云はれカツコーカツコーと云ふが如く啼く。ほとゝぎすよりも大なり。さて北安八坂村の東部上籠部落の北に岨つもの上籠山一名大姥山である。中腹に大姥神社あり。社後より西に向ひ尾根の背に傳ひて登る。頗る險、往々鐵鎖に據る所あり。頂上に近き松木立の中に南面して先づ洞窟二つ並ぶ、大なるは横十五歩、奥へ七歩、高さ中央にて二間程。所謂山姥の岩屋なるものは此の二連洞を過ぎて更らに其の上にあるので土地の人お穴と稱へて之を崇敬する。其の大なること横三十歩、奥へ二十歩、高さ中央にて約五間、前記二連の洞と同じく南に向つて開き、東西に長き半月形で半月の弦を下にす。天井は入口の中央最も高く横及び奥ほど漸次低くなりて遂に洞底に合す。洞の奥に押附けて六七尺大の祠を祀る、賽錢箱あり、又ブリキなどにて作れる鎌の形のもの澤山奉納しあり、豊作のまじなひにや、さて諸書の記載によると洞内に二三丈の平石があつて山姥の石座（山姥が其の上で金時を產んだなど云ふ意ならん）と云ふ由なるが、今は何も見當らず

たゞ砂のみ堆し。此等の洞窟はすべて水成岩層の穹窿形に褶曲した其の下の軟質層が風化したる爲に出來たものであらう。隨て所謂石座と云ふやうなものも何時しか風化し去つたものであらうか。又天井を見ると岩質の硬軟相異るに應じた風化作用の自然的技巧で渦巻や曲水や色々雄渾な紋様が彫刻し出されて居るのである。其處で之を山姥の岩屋であると云ふ說、(二)昔駿州で彌三郎と云ふものゝ母が山姥となり此處に來て住んだと云ふ說(信府統記)、(三)山姥は工匠が妻と云ふもので十一月十五日は其の洗濯日だと云ふ說及び昔剛氣な武士二人が山姥を見屆けんとして檢束を攀ぢて岩屋の下まで行つたが其れから上は絕壁で登る事能はず其のうちに何物か牛ほどもある大きな黑い尻を洞外に突き出し之に應じた大きな黃境を枚り落したのを仰ぎ見るや二人とも魂も身に添はずほうほう遁げ下つたと云ふ傳說(安養平一般ゞ(四)昔八坂村大塚に一女子あり、乳房が四つ有つたので娶らんとするもの無くよつて尼となり妙善と號したが七十歳で發狂し此の洞に住んだ(八坂村)など色々の話り草が生れたが、其れ等種々なる說は其れとして置いて、此の上總山の山姥で誰しも聯想する事は彼の謠曲の「山姥」であらう。あれは曲舞の「山姥」と云ふのを上手に舞ふによりひやくま山姥と名附けられた遊女(舞妓)が越中と越後の堺なる上路の山(今越後國西頸城郡上路村の東北)で鬼物の山姥に出會ひ、夜を徹して舞はせられたと云ふ事を作つてあり、寬正五年足利義政の頃から上演、所作は勿論文句まで大天才世阿彌の作であらうとの事であるが、要するに山姥とか山男とか云ふものは足利時代のみならず大昔から到る所に其の傳說があつたもので、其れが偶々世阿彌の藝術に題材とされたものであらうが、上州又は上總成ひは揚呂と云ふやうな山名と山姥と關聯して居る事に於て、謠曲「山姥」と八坂村上總山と一致して居るので、其處に如何なる理由有るにや識者の敎へを乞ふ次第である。

○昔なつかし木崎の湖畔、仁科城趾に散る櫻
○昔鹽市今飴市と、武士の情を語りつゞ

【解百〇六】 永祿十年駿河の今川氏眞、相州の北條氏康相謀り、武田信玄の領國へ鹽を入れる事を禁じた爲、甲斐信濃上野の民は大いに苦んだ。上杉謙信が之を聞き、持つて生れた義俠心で今川北條の卑怯な憎み、即ち其の領國越後の鹽をどし〳〵右三國へ入れさせたと云ふ、永年の敵に對してさへ謙信は此の雅量を有つて居たのである、殊に思ふ、昔て兩雄和議の成らざりしも信玄の無禮が謙信を怒らせたるにより、又謙信上洛の時には信玄は約に反して謙信の領城餌が嶽城を攻め落したる等、信玄の謙信に對するや武士道の何たるを顧みざる事屢々であつたに係らず、一徹なる謙信がなほ此の人道的態度を示したるは實に日本武士の典型と云はねばならぬ。此の鹽の着いた時の嬉しさを記念するのが今も一二月の頃町々で行はれる飴市(昔は鹽市)であると云ふ。凡そ人類愛の高唱せらるゝ今日さへ、なほ經濟封鎖など云ふことを以て敵國を苦しめやうと考へて居る所を見ると、人間の道德と云ふものは幾百年經つても少しも進歩して

は居らず、群雄割據の未開時代も二十世紀と誇る今日も、全く同じ水準、否讓信ほどの立派な人間が見えないだけ世界の何れの邦國も其の道徳は我が戰國時代以下で、修羅、畜生、餓鬼と、順次墮落の過程に在るものと考へられても止むを得まい。

○佐々成政さら〳〵峠今ちや女子も樂に越す

【解百〇七】 さら〳〵峠またさら峠、砂礫多き意味とも云ひ、又佐々成政が越えたので佐々越えの意味とも云ふ。大町から針の木峠を越して太良川(だいらがは)即ち越中で云ふ黒部川を渉り、立山(たてやま)連峰の尾根續きを乘越す所で、其れから立山温泉を經、常願寺川の谷から越中へ出る。今では當に通られる登山路の一であるが、昔は安曇の獵師か越中立山をかける行者などが通行するだけの一徑であつた。富山(とやま)の城主佐々成政が、遠州濱松の家康に據らんとして此の山越えをして安曇に出たのは天正十二年も滿目皚々たる雪に埋められた十二月の頃であつた。此れは恰も西紀前二百十八年カルセーヂの勇將ハンニバルが本場のアルプスを乘越えて敵國羅馬に侵入した話と比較されるのであるが、成政の此のアルプス越えに先つ事二年、天正十年七月十七日には小笠原長時の第五子貞慶(小笠原伯爵家の調査に成る「小笠の光」に據れば貞慶は長時の第三子とす)其の叔父洞雪と和して深志城を恢復し即日松本城と改稱したのであるが、其の頃より家康に好を修めて居た貞慶は、專ら其の支族小笠原貞政をして家康と成政との間を斡旋せしめ、其の結果成政のアルプス越えとなつたものである事は未だ世に知られざる史實である。貞政は長

朝の二男で、貞慶の曾祖父貞朝の弟である。貞慶の父長時が天文二十一年十二月中塔城退去の際は、長時の長子長隆、五子小僧丸(後の貞慶)、舍弟貞種(後の洞雪)、及び此の貞政、貞政の長子長堅(又は長賢、刑部少輔)、次子賴貞(出雲守)等皆隨從した。其の後中塔城主二木豊後守重高等小笠原の支族をはじめ仁科の領主仁科盛康等も概ね武田の旗下に參じ節を枉げて回天の機を待つの外無かつたので、貞政等父子も亦出でゝ降り、川中島等にまで出陣せねばならなかつた。が其の際小笠原姓は武田に對し之を憚り標葉(しめは)姓を用ゐたのである。蓋し標葉は後の楢(しん)葉(は)で(徳川氏が濱松より貞政に寄せたる文書其の他には又新野(しんや)と書す、蓋し皆音通なり)曩朝の時、小笠原長清、信濃の守護として甲州より信州伊那郡松尾に入りたる當時よりの氏人であつた。即ち標葉(しめは)、下枝(しづえ)、於曾(おそ)、櫛置(くしおき)、之を小笠原家四天王と云ふ。天文の頃此の門葉中著はれたるものに標葉與五郎政信等あり、東筑明科驛東の山腹なる小谷(こや)城址は右政信の據りたる所と云ふ。貞政が家來筋なる此の標葉の姓を用ゐたのは其れだけの血緣もあり又其の族の衰滅を憐んだ意味も有らうと云はる。斯(や)がて武田氏亡び貞慶深志を恢復するや、貞政は老齡にも係らず擧げられて中塔の北なる小倉の城主となり、又曾て小笠原政康時代に興隆を圖つた其地淨心寺を再興し改めて其の開基となつた。續て貞慶日岐大城に丸山丹波を攻むるや平出口(ひらいで)邊擊の將となり、又上杉景勝の下越後新發田城征討には貞政、貞慶よりの援軍に將として折からの積雪を冒して春日山に到り、直江山城守登續の勢に合して力闘、且つ修好の使命を果たし、又家康、成政の間に奔走しては遂に成政をして家康に據るを得しめたる等、貞政は一面には小笠原支族

として社稷の重きに任じつゝ一面には老來圓熟の外交手腕を以て群雄の間に折衝往復を重ねたる次第であつた。成政濱松に赴くの翌、天正十三年正月二十二日貞政病んで沒す。其の後貞慶、或ひは家康に好きが如く或ひは秀吉に通じ、雙方の疑ふ所となりたるは惜むべく、天正十八年八月小田原陣に於て、遂に秀吉の意を損じ、所領沒收、嫡子秀政に附して下總古河に移された。此の際貞政の嫡子長堅（一說に早世すと）及び次子賴貞（嘗て秀政の弓馬の師たり）等戰亂佐倉に飽き、秀政に隨て古河に移らず、其の子孫、貞政以來の家乘什物を携へて高瀨川の西、板取の里に隱れ農に歸す。佐々成政さら〳〵越えに關し、記して史家の參考とす。

○貞享三年其の霜月の、二十二日は嘉助樣

○露の命は散らさば散らせ、嘉助五分摺り二斗五升

○彼れは松崎の高橋樣よ、四　庄騷動も拜み行く

【解百〇八】　大町の東南なる社村字松崎の高橋氏は昔から慈善を以て知られた名家である。一回又は一代の德行は世に其の例有り。高橋家の如く歷代の家風として實踐せられた事は稀れであらう。凶作の度びには幾百俵の籾を出して近鄕を救ひ、火災や極貧者の救濟の如きは不斷の事、其の間には廢れたる名家の賴りて再興し得たるものも少なくなかつたと云ふ。されば明和、安

永、天明より寬政、享和に至る平兵衞、文化、文政、天保、弘化に亘る佐五兵衞（平兵衞の曾孫、佐兵衞の男）などの名に至つては鄕黨に神の如く敬愛せられたのである。斯く代々の德行擧げて數ふべからず家產爲めに傾かんとさへ憂へられるので、嘗て親戚一統より諫言を入れた事があつたが、人の難澁は座視する能はずとて聽かず、自ら常に奢侈を戒しめ粗衣粗食を事として家業を勵まし範を鄕黨に示しつゝ、專ら施與の資を作り出すを以て累代の本旨とするものゝ如くであつた。其の爲め領主より大庄屋格式、御扶持下され、苗字帶刀御免、又は御掛物下され、殿中にて御料理頂戴、火事羽織合印御免、或ひは又帶刀獨御禮等の待遇を加へられたること幾回なるを知らず、其の間には又固く御辭退申上げたる事も少なからず、例へば天明四年三人扶持御下賜は平兵衞遂に御受け致さず、又天保八年永續金獻上、同十二年大町圍ひ籾として二百俵出したる時の如き永代三人扶持の恩命があつたのに當主佐五兵衞はとう〳〵御辭退で遂してしまつたとは、到底世の當の慈善家の思ひ及ばぬ所であつた。さて文政八年は戶田候治封百年の祝典はあつたが一般に不作、四ヶ庄小谷殊に甚しく、藩主は其の地に年貢半減を令し、松崎高橋佐五兵衞は例により、籾數百俵を見舞として送つた。が富豪酒造家等及び四ヶ庄特產たる麻の問屋等此の機に乘じ奇利を得んと力むるありて衆怨を買ひ、十二月十四日佐野澤渡に蜂起した騷動は忽ち飯田、飯森、鹽島、細野、野平、嶺方、堀の內等に波及し其の衆多くは山葡萄の皮で作つた蓑を着て押出した。後世之を四ヶ庄騷動又は赤蓑騷動と云ふ。此の騷動は決河の勢を以て南下し行く〳〵暴民を加へつゝ大町、池田、穗高、新田等を破壞したが、其の大

町に於けるやあらゆる富豪を侵掠したるうち一隊は下中町重田屋杉木恒四郎方に亂入せんとしたる時暴民中一人あり、當家は松崎高橋樣の緣家なりと呼びたるより何等の害をも加へず一同素直に引き去りたりと云はる。されば時の大町代官中村彌平左衛門は專ら高橋佐五兵衛を起たしめて騷動を鎭撫せしめんと試みた。よつて佐五兵衛は松崎欄干橋（らんぷんばし）に酒食を供へて暴徒を迎ふ、暴徒等拜跪して嗚咽するもの多し。佐五兵衛歸村を諭す、衆從はんとす、時に一人有り、代官及び野口村大庄屋西澤九之丞との對面を得、一同安堵の口約を得たしと云ふ、佐五兵衛よつて大町陣屋に赴き代官及び九之丞を求むるに兩人とも焦燥の結果佐五兵衛の折衝を待つの餘裕無く鎭壓の應援を求めて松川組大庄屋清水又之丞の許に走りて陣屋に在らず、暴徒此の報を得、佐五兵衛に謝して又南下、池田を破壞し次で穗高を衝くべく正さに高瀨川を渡らんとす。此の時代官中村彌平左衛門、大庄屋西澤、清水等、松川組人夫數百人を以て橋南を警固す。よつて高橋佐五兵衛又暴徒に說き願意聞屆けの代官の聲明を保證し歸村を諭す。今や赤蓑は心身共に疲勞の極に達し、且つは松崎欄干橋にての佐五兵衛との前約により代官、大庄屋との對面、且つは安堵の言質をも得たる上は速かに歸村せんと議する所、佐野坂以南より參加の連中今や赤蓑に數倍す、口々に罵つて曰く四ヶ庄の野郎共佐野坂を越して出て來て我等の恩家や緣者を打毀はし我等を强制して此に至る、今に於て我等を捨てゝ歸村するとならば、我等又尾して佐野坂を北に越し、汝等の鄕里を燒野ヶ原と爲し以て深仇を報ゆべしと、鎭撫乃ち成らず。暴民は少數且つ疲憊の極にある赤蓑を捕へて强て先頭に立たしめ、橋の上下より高瀨川を押渡り投石

すること雨霰の如くなれば、警固忽ち破れて松川組人數は四散し其の一團は却て暴民に參加、穗高、新田（現今の豐科）に至り片端から富豪を破壞掠奪するにぞ、新田周圍の村々亦蜂起して之に應じ其の數三萬に達す。松本藩にては此の鎭定の爲、遂に物頭四人、大目附二人、郡奉行四人、使番三人馬乘にて同心足輕數百人武裝出動、空砲を發し三百餘人召捕るの止む爲きに到つたのであつた。此の暴動に應じて小谷にても蜂起し、酒造家富豪等多く其の厄に遭ひ五人衆出原山田等も打毀はしを蒙つたが、源長寺住職某なるもの氣魄才辯有り解散を諭す、暴徒等赤蓑の鎭定をも聞きたる事なれば即ち解散して皆家に歸り何食はぬ顏して居たと云ふ。抑も戸田氏の治世は仁君相續ぎ領民は泰平を樂み得たるに係らず斯かる暴動の有つた事は、全く富豪や商人等の心得の宜ろしからざりし結果であつて（何時の世でも此の邊の事情は似たものであらう）此の間に處したる松崎高橋氏の何時も乍らの苦心努力は全鄕土から最大の感謝を捧げねばならぬものであつた。積善の家餘慶有り、今高橋家當主を正雄氏と云ふ。

○殘る譽れは槍より高い、播隆行者の足の跡

【解百〇九】 今を溯ること百二十五年、文政九年八月、漂然として松本に現はれた行者播隆は、槍ヶ岳の麓を尋ねて小倉に到り御鷹役人中田九左衛門を訪ひ、其の分家中田又十郎と共に出發、初めて槍の頂上に足跡を印し、又十郎は一時下山、播隆は四十八日の滿願を以て下山、次で文政十一年七月再び又十郎と共に登山、頂上に佛像を安置し又四十八日の行を修し、天保四年秋

には弟子五人及び又十郎と共に登山、翌天保五年には槍の峯より根元まで鐵鎖をかけ同時に頂上に祠を据えた。此の鎖の殘片は明治三十年頃までもあつたと云ふ。天保大饑饉には是れ怪行者の所爲なりとして飛驒の農民から竹槍を以て迫られたが更に屈せず、登山前後五回に亘り、靈峯の名漸く著はる。晩年美濃國揖美町城臺山に播隆院阿彌陀堂を建てゝ居り後中仙道太田宿に沒す。生涯俗名及び出生地等を語らず、眞に槍ケ岳の爲に生れたるが如き積德の行者であつた。

○登る宮城お婆が茶屋で、山の宮樣お小休み

【解百十】 去る大正十二年秩父宮樣御登山の節、宮城有明山神社前の掛茶屋で何時もの如く茶を賣つて居た老婆の店へ無造作にお腰を休ませられた宮樣が「お婆さん、茶を一つ呉れよ」と仰せられたので、老婆は只管に恐れ多い由を申上げたが、たつての御言葉とて遂に仰せのまゝ、有り合せたる一個二錢五厘の御茶椀（老婆謹話による）と申す恐れ入つた器であつたが、なみ〳〵と汲んで御傍まで差上げた。宮樣は御喜びになつてさもうまさうに召上る。此の御樣子に御隨行申上げた人々何れも恐懼し奉つたのは勿論であつた。老婆は其の後、宮樣のお腰を懸けさせ給ふた所だけ埒を構へて嚴に不淨を戒しめ、朝毎に時節々々の花を供へて御高德の程を拜み奉つて居るので、地元有明村は固よりの事、なほ丸山某氏や其の他の特志家も顯はれ、現場を保存の施設いたし、今や軍人學生は勿論、心有る登山客たちも往き返りに立寄り、お慕はしき御跡を拜し奉る次第なれば、正しく一名所（と申すは恐れ多けれど）が出來て仕舞つたとは、

畏くも日頃平民主義に渡らせ給ふ宮樣の御恩澤の程、吾等鄕土人として子々孫々に語り傳へ實に有り難く仰ぎ奉る次第である。

○天明行者は扇町產れ、お山開いて名を殘す

【解百十一】 天明行者は烏川村字扇町の產、倉田氏、明治年間の人、有明山信仰登山に就き道を開き講を結び其の他遺功少なからず。

○河野先生は一と目で知れる、日本アルプス山の主

【解百十二】 河野齡藏先生が大町小學校長たりし頃より今日の地位に到られるまで、日本アルプスに就き其の深遠なる學殖と前後幾回とも知れざる高山地帶の蹈査とを以て、努力一貫遂に國立公園の今日あるを得しめられたる事は、餘りにも周知の事實であるが、謹嚴沈毅なる先生が畫技に精しく又武道の達人たる事に到つては或ひは知らぬ人も有るであらう。蓋し秀麗なる日本アルプスの精氣凝つて人と成るもの即ち河野先生である。

○春日先生は鞄をあけて、なほも詰め込む土器の片

【解百十三】 安曇の先住民遺跡に就き鄕土人に研究の指針を與へられたる第一の恩人は實に前大町中學校長春日賢一先生であつた。山岳に於ける河野先生と共に此の方面に於ける春日先生の業績は永久朽つることは無いであらう。

○牧の喜作が開いた道は、黃花石南花右左

【解百十四】 石南花は鍋山のものは真紅なるも岳に登るほど其の色黄になり又白くなる。(牧の喜作に就ては解二十三参照)。

○又も行かぬか中山先生、小判堀り〳〵有峯(ありみね)へ

【解百十五】 凡そ此の地方の歴史時代の傳説口碑に就き、深山僻地を跋渉して多年幾多の困難と闘ひ、實地探險の範を示したるものは實に池田町中山喜一先生であつた、先生は佐々成政さら峠越え及び其の軍用金埋藏の傳説に非常の興味を有たれ、其の史實及び其等傳説の由つて來る所を蹈査しつゝ殆ど其の半生の血氣を此の事業に傾倒せられたのである。抑も先生が其の探險の發源地とせられたる有峯(ありみね)部落は、越中國上新川郡大山村に屬し四方十數里のうち他に人烟を見ざる深山の孤村である。東谷ゝ云ふに五軒、西谷に六軒、其して昔鍬山(とやま)の殿様から彼等が目の屆く限りの山野を所有する事を許されて居たと云ふので維新後も其れて押通したのであつたが、大正に入つて針の木峠の西側から東笠ヶ岳に到る廣大なる地域を富山縣へ賣つた其の金で、毎日酒を飲んだり又は飛驒の船津へ下り或ひは富山市へ出て慣れぬ商賣をやつたり田地を買つたものもあつたが概ね失敗に歸し、這う〳〵の態で古巢へ逃り附いて見た所、周圍の山林までも賣つてあるので自分の薪にさへ不自由する有様になつたと云ふやうな悲慘な話、矢張り彼等は數百年間先祖傳來の山奥生活を其のまゝに、無盡藏の山の木の實、川の魚、乃至うど、わらび、栗、稗を食べて天然の毒を樂んで居た方が幸福だつたのである。其處で中山先生が初めて此の地方に其の足跡を印せられたのは實に明治四十五年で八月一日に出發、人夫三名を引連れて一

ケ月半に亘り第一回の探險を試みられたのである。其の目標とする所は天正の昔佐々成政が金鑛探獵に力を盡し九億八千貫の金を得(軍用金の豊富を以て豊臣秀吉の疑ふ所となれりと傳へらる)其の大半を山中に埋藏せりとの口碑あり、特に其の埋藏個所發見に就き或る程度のヒントを得られたるを以て、其を事實に徴する事に在つた。固より廣漠たる山野溪谷に亘る蹈査なれば、一回を以て足るものにあらず、更に翌大正二年には人夫二名を以て八月十五日に出發し日子一ケ月を費し同三年には又人夫二名を以て八月十日出發し日子二十日間、以上大正の初年より三年間は斷續事業として毎年出かけられ、其の探險の地域は實に常願寺川の上流なる眞川の谷、スゴウの谷、薬師岳から鷲岳に及ぶ數里の間、苟も此處ぞと思ふ所は悉く現地蹈査多くは發掘を試みて餘す所が無かつた。が金鑛精錬の遺趾を確認したるを以て假りに滿足し、他日更に計畫を改めて捲土重來するの外無きに至り、其の後十三年間鳴かず飛ばず專ら調査を重ねられ、更に昭和二年九月五日人夫二名を以て出發し十五日間、又翌々四年十月八日人夫三名と共に出發し十四日間に亘り蹈査、斯くして大正の初めに三回、昭和に入りて二回、前後計五回の探險を試みられたとは其の寔志の不撓不屈なる實に驚嘆に餘り有り。其の間には生命の危險を感じたる事も幾回かに及び、鉢伏山と云ふの密林中では二間も有り相な大蛇に出會し一同膽を潰して逃げたること、佐々成政鍛冶ぎと云ふ絶所では龍巻きと云ふ暴風雨の難に遇ひ食糧等全部誠茶苦茶にされ且つ其の間は又濃霧で咫尺を辨ぜず三日二夜居ずくみ〳〵なつて居たる事あり、恐ろしい中にも痛快であつたのは寔岳のとある絶壁で仔熊と格闘、打殺して旅行中のおさかな

となしたること、又藥師岳の中腹なる高天ケ原の絶景に立つて雲烟遙かに信州の山並みを眺めたる時は何とも云ひ知れぬ感慨に打たれ、殊に愉快であつたのは有峯の親方大野太右衛門氏方の幼女の大病を治してやつた其の禮心に盛大な岩魚狩をやつて見せて呉れ、一日中樂み暮し、仕舞に獲れた岩魚の五六貫匁も貰つた事などであつたと云ふ。斯くして先生の探險は再び雌伏時代に入り速くも玆に五年を經た。恨むらくは彼のコロンブスが黄金島ジパングーを尋ねて却て米大陸を發見したるが如き結果を得るは何れの時か知る事は出來ぬけれども、先生の此の探險旅行の爲に斯かる方面の智識と趣味とを啓發したる點に於ては、中央亞細亞を探險したスエン、ヘヂンや日本では鎖國時代に遠く小笠原島を發見した小笠原貞頼、又は唐太より深く韃靼に入り黑龍江流域を窮めたる間宮林藏などを想起せしむるものがあり、其の社會思想に與へたる影響は頗る大、既に富山縣の如きは先生の有峯探險以來、佐々成政の史實研究が頓みに盛んになつたと云はれる。或る人曰く、中山先生は寧ろ隱逸世外の人であるに係らずなほ一脈の娑婆氣を存し、一攫千金を得て陶朱猗頓を凌がん事を夢みつゝ有峯くんだりを徘徊すると。此の評全く先生を知らざるもの、先生は元來極めて眞劍の研究に終始する人である。隨て此等黄金埋藏の口碑をも單なる「黄金千樽漆千樽」式の民間傳說とのみ解する以外、其處に何等か史實の潜める無きやを確むべく幾多の困難を意とせられなかつたので、所謂小判其のものは直接の問題では無かつたのである。要するに先生の如き出色の人物を生んだ事は、實に吾が郷土の誇と云はねばならぬ。

○おらは毎日田の草取るが、今に悅二郎天下取る

【解百十六】 植原悅二郎氏は南安明盛村中萱の舊家に生れ、少壯米國に押渡り苦學、更に英國に入り、螢雪功成つて英國法學博士となる。歸朝後憲政擁護運動華やかなりし頃の犬養木堂に識られ革新倶樂部に參加、理想主義の大旆を押立てゝ郷里より立候補するや中萱嘉助の再來として、政界廓清を渇望しつゝありし青年派の情熱的支援を得、旗鼓堂々中央政界に乘出しつゝ、其の黨内にも重きを爲したのであつたが、右革新派の大多數が政友會への身賣と共に、小煩るさい青年理想主義者と當然絶緣しつゝ、所謂政治は理想にあらず事實なりの旗幟愈々鮮明、參與官から今は又衆議院副議長、此の分ならば天下を取るも遠かるまじく、吾等郷黨は田の草取り〳〵其の出世を待ち望んで居る次第。

○おらが陸郷は村長様も、安曇踊の免狀取り

【解百十七】 陸郷村長遠藤嘉壽氏は前縣會議員として名聲嘖々たりし遠藤八志路氏の衣鉢を繼ぎ北安政界に重鎭たり。人に接する洒々落々、郷黨の爲めに身心を勞して倦むことを知らず、眞に至誠の人である。

○笹部から飛ぶ長谷川飛行機、安曇平を一と走り

【解百十八】 飛行家として多年辛慘を嘗め、吾等郷土人を啓發して來た長谷川清登氏は、吾等に取つて永久忘れることの出來ぬ人である。

○信州松本國粹市長（松本市長小里頼永氏）五層天守よか名が高い

○壽三代金時レコード藝者、後の世までも名が殘る

○およし野に出て草刈る時は、桔梗の花だけ刈り殘す

○桔梗殘して草刈るおよし、おらもなりたや桔梗花に

○およし草刈る赤芝原（松川村）の、上で蔦が輪をかける

【解百十九】 安曇節では美人の名は常におよしであり、此れに對し若いものゝ名に五作など云ふのがあつて樣々素朴な所をお目にかける。又都會の美女美男をば小町、業平など申上げて敬意を表して居る次第です。

八風習

風俗

○八坂廣津の百姓はつらい、背なで厩肥しよひ上げる

○八坂馬どこ縹緻好い娘でも、馬に乘れなきや嫁にせぬ

○安曇娘の働き振りは、赤いたすきに雪袴

○赤いたすきに紺雪ばかま、風情添へます菅の笠

○昔からだよ鹿島の村は、増へず減らずの十二軒

○鹿島男は皆山かせぎ、女借馬（地名）へ通ひ作

【解百二十】 別天地鹿島の事は前にも述べたが（解四十六、參照）所謂鹿島十二軒と云ふのは昔は坊樣も居た中央の觀音堂まで入れての事である。今は其れは分教場となり別に觀音樣は小さなお堂が出來た、其れや又集會所や北に離れた鹿島大明神まで入れゝば十五軒とも云へるか。兎に角人の家としては十一軒で、其の内譯は勝山姓三、川上姓一、宮坂姓五、加納姓二である。大正六年十二月三日九戸丸燒けの大火に遭つたが今は八戸が板屋造りで三戸が萱屋根、但し其の屋造りの大なることは何れも甲乙無く、其して等しく南向き、魚貫したる如く南北に一列に續く。場所は鹿島川の奥、三方山に圍まれ南だけ開いた此のお伽の國の樣な一小山村にも、權勢爭奪や戀愛葛藤やさては南方安曇平の空を望んで文字通り圖南の鵬翼をばたつかせて見た人間もあつたであらうが、何でも彼でも昔からの家數を以て制限したるが如く、總べてを其の流儀で抑へ通して來た人々の生活を思ひやれば云ひ知れず涙が湧く。男衆は毎春雪のあるうちに全部山へ入り木を伐り出して雪の上は橇で、雪無き所は土橇（地面に丸太を並べ魚油を塗つて滑かにした所）で出し鹿島川へ流す。之を冬大町で金に替へ大歳までに歸つて來るのである。男が山に入つて居る間の女衆も只は居らぬ、何の家も平村借馬の五反田と云ふ所に田を有つて居るので、二里半も離れた其處へ女衆が所謂通ひ作をすること仲々大變である。されば元日から

大晦日まで夫婦相連れ共稼ぎと云ふ如きは鹿島ではとても望み得べからざる事であつた。

○清水（常盤村）女は男にまさる、デツで酒飲み馬を牽く

○馬の鞍山、メンパを附けて、今日も清水の女馬子

【解百二十一】 清水部落は山裾に在り昔は薪炭を馬の背にて穂高方面まで附け出して賣つたのである。又一合入りの茶椀又はコップにて一杯何錢と云ふやうにして店頭でひつかける酒をデツパ又はデツと號し其の味は其の境涯に在るものゝみの獨專である。メンパは一種の辨當ばこ。

○合せメンパを只張合ひに、山で木を伐る日の長さ

○背中あて（藁、又は樹皮で作つた背嚢）からメンパを出せば、喰ふと鳴いたる腹の虫

○尾根の頭でメンパをあけりや、空で輪をかく山烏

○お世話樣だよメンパの中へ、黄粉ふりまく松の花

○朝の出がけにメンパを忘れ、山でがつかりとくたびれた

○蕎麥の燒餅片面焦がす（解百二十三、參照）野麥自慢の大榾火

◎あげて廻して叩いて吹いて、嚙ぢる燒餅や大神樂

○蕎麥の燒餅小豆を入れて、里のみやげに持たせやる

○谷のちよろ〳〵水乘ツ越し車、一本杵にて麥を搗く

○聞けば谷間のあのガツタリは、ガタリガタリと夜もすがら

○夜の夜徹しあのバツサリは、月を汲んでは又こぼす

【解百二十二】 上から水を被つて廻る水車を乘ツ越し車と云ひ、また水車に似て其の水を受くる所四つの箱に過ぎず、風車の如く組んだ其の四つの一つ〳〵に水滿つる毎に押下げられてガツタリの又もやガツタリと九十度づゝ廻つて行く之をガツタリと云ひ、水を受くる所只一つ、即ち中央な支へられたる大きな横木の一端を凹め又は舟の如き形の箱を一つ取り附け、其の凹みに水滿ち來れば自ら押下げられて水を排き出し、排き出せば輕くなつてバツサリンと元の高さに上がる、斯く此の端が下がり又上がれば他の杵の附いてる端が上がり又下がる、其の下がる時麥などを搗くと云ふ、文字に書けば複雜、實物は至つて簡單原始的なもの、之をバツサリと名附く。

○山が山抱く野麥の村は、蕎麥のやきもち稗の飯

○兄さ泊まらし馳走は無いが、蕎麥のやきもちこが〳〵と

○加減ものだよ蕎麥やきもちは、直と火が附き焦げたがる

【解百二十三】 抑もである。小麥は穗落しと同時に殼を脱す、之を粉に碾き次で粉と鹼とに別つ。

小麥粉は麺類と爲し又は燒餅と爲して食する。次ぎに大麥は穗落しだけでは殼を脱せず、之を搗きて漸く殼と別ち、次で引き割つて麥飯として食する。「一本杵にて麥を搗く」などあるは此の大麥の殼落しを云ふのである。終りに蕎麥は稜麥の略、莖より落したるを輕く臼にかけて殼を脱せしめること籾の如くし之を粉に碾き蕎麥切り（略して蕎麥）とし又は蕎麥搔き或ひは燒餅として食す。小麥燒餅に比して蕎麥燒餅は固くこくり〳〵して居り、且つ燒く時焦げて火が附き易いもの故女衆も油斷しては居られぬ。恪氣に熱中して思はず燒餅を焦がして仕舞ふことも有り得べく、乃ち恪氣する事を燒餅をやくとは何れ吾が安曇の如き蕎麥燒餅の山國からでも云ひ出したものであらう。

○ちよいと凹みに深見澤五軒、思ひ〳〵の家造り

○屋根は屑屋で竹槍を差して、挾んで引出し締める繩

○雪のアルプスこだつで眺め、俵屏風の冬ごもり

○四ヶ庄街道で嫁入りを見れば、たんす長持や橇で行く

○橇で客曳く四ヶ庄の衆も、夏は四ツ谷へ踊り出る

○欲に目の無いはりか（蚤子）のだるま、蠶あてろよ目を呉れる

○玄蕃樣では社務所の達磨、きゝめ有るとて二割高

【解百二十四】 南安柏矢町の南、細萱の玄蕃稻荷、養蠶の神樣とて毎年初午には大賑ひを呈し張子の目無し達磨を賣るもの境内に列を成す。之を買つて來て、蠶が當れば其の時墨で眼睛を點じてやる、當らねば目の無いまゝ打ち毀して川へでも流すか、尻から棒を通して翌春の苗間の雀威かしにでもするぞと云ふ祈願乃至脅喝をして神棚に祀る。祀られるものよりも祀る人間の方が欲に目が無いので、如何な達磨樣でも斯うなつちや災難で有るです。

○霞む中房橋架け普請、鼠村中の男役

○渡り初めには人形が渡る、橋場、島々、雜仕橋

【解百二十五】 上高地の入口、島々から橋場へ架けられた雜仕橋（又は雜司橋）は、昔から其の架替の渡り染めには、先づ橋場から女の人形を引渡すと島々からは男の人形を渡す、最も近頃モダンに改造した時は此の古例は行はれなかつたとは心無き次第であつた。傳說によると昔橋場の岩女と云ふもの、此の通りに橋無くして數里の廻り道をせねばならぬ諸人の難義を救はんと發心し（一說に女の名はおせつで對岸に淸兵衞と云ふ戀人を有つたが爲との說も有る）多年人に仕はれて（雜仕）、又一說には日常非常に粗食をして（雜炊などで）飢えを凌ぎつゝ漸くにして貯へ得た金を投じて架橋した、例の女の人形は其の岩女を象り、男の人形は岩女が願をかけた安倍晴明（一說にはおせつの戀人淸兵衞）を表すものであると。是れ雜仕橋或ひは雜炊橋

と呼ばるゝ所以であると云ふ。梓川渓谷の風景も此の辺り特に絶妙である。

○法道迦れば傳五郎様に、願ひ上げたる石の數

【解百二十六】 池田町の東北、中島より廣津に越ゆる峠を稍や南に下れば法道部落に到る手前に於て路傍北側に祭があり小石が澤山上げられてある。之を傳五郎様と云ふ所以は法道の人も知らず只麻疹の神様など云ふのみ。峠は手向けてあつて（或ひは蒙古語タバーと關係あるか）其處を越える時其の地主の神に幣を手向ける。略式としては藁を木の枝に懸けるとか花の枝又は小石を捧げるなどは最も普通に行はれた事で、朝鮮や蒙古にも亦此の風は共通して存すると云ふ。斯かる石塚を蒙古にてはオボと云ふ由、鳥居龍藏先生の旅行記に明かなり。菅公の逸話に「此の度びは幣も取りあへず手向山、紅葉のにしき神のまに〳〵」と歌つて宇多上皇様の御氣色を直し奉つたと申す事も思ひ出される。されば傳五郎様も此の手向けの神に由來した石塚であつたであらうか。今でも此處を通る人は必ず小石を捧げる事に決められて居る。

○仁科大町借馬市場、證も取らずに馬貸せる

○いくら食ふてもまだ喰へ〳〵と、しげる（張ふる）水室の大師講

○氷室大師講喰物しげて、出隣出たそだ其れ逃げろ

【解百二十七】 傳教大師入唐の時、智者章安妙樂三大師を奉けるものあり、比叡山の什寶であつたが故有つて此處倭村氷室の大師堂に納まると云ふ。もと林泉寺と云ったが維新廢寺後は小堂一つ殘るのみ。大きな道の北側で南向き、傍には倭消防組のポンプ置場や警鐘樓が立つ。堂も堂らしく無く普通の板屋造りに近いから消防組詰所などゝしか判斷されない。が奇怪な傳說が此の一字に附着して居る事を思へば物凄くなつて逃げ出したくなる。と云ふのは昔から此れには大師免と云つて六俵の除地が有り毎年十二月二十三日の大師講には其の上がり高全部を饗宴に消費してしまふ慣例であつた。勿論、當中だけでは飲食し切れぬので通りがゝりの他村の者などを捉へて之を强ひ、若し强ひ殺して死に至らしめてもお咎めは無かつたと云ふ。其の食を强ひる道具に鼻捩ぢ、口詰め鐵輪、詰込み棒、梯子等あり。梯子は逃げぬやうに之へ身體を縛り附けて置いて口を割つて詰込むのだとは聞いたゞけでも身の毛がよ立つ。但し今日では勿論此んな風習は行はれては居らぬから他村の衆も安心して參拜さつしやるやう、其して歳日には豆腐を上げさつしやいと大師樣の御夢想だとやら。

○竿の頭へすいのと錄を、附けて除けます辰巳風

【解百二十八】 すいのは汁の中から食物を抄ひ取るに用ゆる竹で編んだもの、竿の頭に之と錄を附けて屋根棟に立てるのは大風を抄ひ取り錄で切り拂ふのまじないであらう。秋の頃辰巳から吹く風は安曇では大低暴風である。

○褌を流した鹿島の衆も、歸る舊歳大晦日（解百二十参照）

○年は取りても昔の若い衆、白髪はやすもしやれのうち

【解百二十九】　安曇にてしやれると云ふのは洒落、冗談などの意にあらず、服飾を派手にしたり、などして容儀ふる事である。

○安曇電氣（安曇電氣株式會社の事）も光るにや光る、おやぢ頭はなほ光る

○禿げた頭に蜻蛉がとまる、とまりやすべるで又とまる

○藥鑵頭で天日を取りて、ちよいと煙草を吸ひ附ける

○禿げた頭は床屋の儲け、同じ値段で刈るは樂

○床屋泣かせの禿げかん頭、顏か頭か解りやせぬ

○頭禿げても踊にかけちや、光り輝く管頭取り

○赤いたすきに螺々がとまる、娘二八の花盛り

○たんぼ好いとこ五月になれば、野良に働く赤だすき

○春は花見で衣裳をかざり、夏は田の草袖ぬらす

○茨の花をば黒髪さして、覗くどんぶら水鏡

【解百三十】　どんぶらは小さな池、水溜りである。山から來る水が砂を伴ふので、田へ入れるに先ち、深く穿つた水溜りて其の砂を沈澱させる、其等もどんぶらである。アイヌ語水溜りをトポと云ふ。どんぶらは此のトポに關係があるであらう。因みにアイヌ語は語頭にDは無い、皆Tに變音するのである。

◎法道山里あの山蔭に、池田まさりの花が咲く

◎鄙嶋、石南花、深山を照らす、きりやうの好い娘は鄕照らす

○さとで欲しがるきりやう好い娘、八坂廣津の奥にある

【解百三十一】　此處でさとと云ふのは山間部に對する安曇平の村々を云ふ。

○賤が伏屋も好い娘を持てば、玉の臺に增す光

◎娘年ごろ障子がもたぬ、障子目だらけ穴だらけ

◎目玉光るはとんぼかあぶか、人の障子に穴あけて

◎覗き見をして目をつゝかれた、兎角覗き見ア目の毒だ

○姉は十七踊の上手、妹十六唄上手

○柳腰なら踊にやむきだ、嫁に仕立てりやなほむきだ
○安曇娘の化粧の水は、お花畑の花の露

◎娘十四五ほろ〳〵涙、百合の蕾にかゝる露
◎泣いて眺めりやお月も曇る、泣くなお十七目の毒だ
◎泣くな十七泣かずと語れ、泣いちや理も非も解りやせぬ

◎來るな叩くな門田の水鷄、うちの娘は聟貰ふた
○心して吹けアルプス颪、嫁にやる娘の手が荒れる

○此方ら紫先や紅で、赤い耻をばかきつばた
○柿の名所の陸郷村へ、柿をかづけに嫁さがし
◎松川田どころ良い米どころ、娘やりたや聟欲しや
○嫁に行く娘が落穗を拾ふ、これが吾が田の見納めと

○雪の佐野坂嫁入りや通る、見れば嫁様橇の上
○流行廢りは何でもあるが、嫁の丸髷昔から
○嫁は乘り込む聟小座敷で、嫌れな煙草を矢鱈吸ふ
○屋根へ上げたる草履もあるに、裸はだしで出て戻る

【解百三十二】 婚禮で嫁殿がいよ〳〵門口へ乘込む時は新しい草履をはかせ、其の又草履を奪つて其の家の屋根へ投げ上げてしまふ。萬一此の家を出て行き度いとなつても履くものが無いぞと云ふ意味である。さて嫁住み後に及び其の家の方に無理が有つて嫁が出て行く場合は、嫁は嫁入り道具一切を携へて離縁することを得れども、嫁に落度が有るか又は居堪らず出て行く場合などは、嫁入り道具は固よりのこと着物一枚履き物一足身に附けることは出來ないと云ふやうな事があるから、此の歌は嫁に何か落度などがあつて居堪らず飛び出した場合と知るべし。なほ安曇にては離縁して出て來た女性を出様、落度あつて追ひ出されたのは特に出され様の尊稱を奉るとなん。

○姑婆と英語の文は、譯も解らずよめにくい
○憂いか辛いか青松くべて、烟がしみるか目に涙

◎娘見たさに來いと云てやれば、見たくでも無い顔が來る
○春の花嫁もう此の頃は、お化粧どころか秋埃
○餅はとたんこあの杵たより、嫁は一代聟たより

十人 情

○積もる雪ならかいても通る、義理は欠いては通られぬ
○夢になりとも持ちたいものは、金の實る木とよい女房

○雪は降る〳〵古酒の値上がる、新酒バイ〳〵やれ頼む
○酒も好きなら飲むなちや無いが、地金出なさりや一剣げる
◎外に文句はさら〳〵無いが、お酒あがるが玉に瑕
○白馬錦（大町産の銘酒）で酔はせて置いて、其處で聞き度いあの事を
○隠しだてして居るのちや無いが、話しやお主が厭くだろ

○血筋なりやこそ來てまで云ふが、赤の他人は蔭で云ふ

○今の人情は紙よか薄い、竹紙がみよかまだ薄い
○境押出し桐の木植ゑて、鬼角欲にはきりが無い
○描ふやうでも描はぬものは、下手な踊と人ごゝろ
○人の心は年々かはる、何時もかはらぬ岳の雪

○信州安曇はなつかし所、おらが婢さの生れどこ
◎見れば懸しやあの野の果ての、雲のあたりか吾が郷は
◎心がらだよ我が土地を捨てゝ、知らぬ他國で苦労する
○よそへ電氣で働くなれば、うちで親達ア行燈する
○昔や行燈で夜なべもしたが、今は電氣で早寢する
○親をだまして金持ち出して、茶屋でこきのき（徹底的）だまされる

○安曇電氣のあかりの下で、白い狐にばかされる
○狐小路（穂高町に在り）と承知をしてゝ、晝の日中にばかされる

○狐小路で目尻を垂らしや、よぢり拔かれる尻毛まで
○狐小路でばかされ拔いて、又も思案のうろて橋
○岳の凹みにや根雪が殘る、迷ふ色町氣が殘る
○岳の道にせ迷はぬものが、里の色町踏み迷ふ
○外面如菩薩內心如夜叉、男殺しのあの笑凹

○咲くにや咲けどもあの岩隱れ、心小さな米躑躅（高山に產す）
○咲くにや咲けどもわしがよなものは、日蔭咲きにて色薄い
○山の中でも苦はアルプスの、深く積みたる峯の雪
◎わしの思ひと谷間の雪は、夏の土用でも解けはせぬ

◎四十々々と鳴く鳥や憎い、三十九だもの花だもの
○昔ザレーで柴舟ニ乘せた、幼馴染が忘らりよか

【解百三十三】 山の禿げて砂礫の露出して居る所をザレと云ふ。ザラ場、ザラ峠などのザラに同

じ。其のザレをすべり下る爲に尻の下にあてがふ松や檜の枝などを柴舟とも柴橇とも云ふ。

○何と云はうが又云はれよが、しだれ柳に春の風
◎首になりたやきせろの首に、たとへ落ちても又すがる

○池田飴市出は出ちや見たが、錢が無ければ見て通る
◎錢も無いのに買ふ〳〵〳〵と、烏買ふ〳〵〳〵と鳴く

○高瀨川原に狐は出ぬが、狐出ますよ吾妻町（池田町に在り）
○お茶屋勤めと高瀨の砂は、流れ次第で西東
◎高い山には霞がかゝる、きりやうの好い娘にや金かゝる
○淵は瀨となり瀨は淵となる、娘年をしりや婆となる

○憎い嫁御の腹から出ても、孫はかはゆい變なもの
○嫁が出て行きや姑が惡るい、姑隱居しりや嫁惡るい

○一度こはれて二度目の縁にや、こざる嫁御もたうね附き

【俳百三十四】 五月借りて來る雜役馬も仔馬（方言にてトーネ）の附いてるのは値が安いと同じく、當方が二度の縁ならば、こざる嫁御も連れ子のある位は止むを得まい。是れ破れ鍋に綴ぢ蓋の法則なりとはちよと御挨拶。

○春のおぼろ夜南を見れば、狐小路で灯をともす
○三味や太鼓の色町アそばだ、ハヘで聞いてりや怪我は無い
○尾花まねいた赤芝原に、招くお茶屋のあの暖簾
◎招くまいぞえお茶屋ののれん、幾ら招いても錢が無い
◎伊勢の古市を出て來る時は、腰に金氣はきせろばか

○朝のサイレン會社で鳴らす、夜はお茶屋で三味を鳴らす
◎三味の二上り調子に乘れば、うちの身上は三下り
○身上すつてもひげだきや劍らぬ、次ぎの選擧にや又も出る

◎わたしやテントキ（俳六十四參照）廣野のわらび、一度折られて二度出る

◎お主や法螺吹き（誇大な事を云ふ人）ならしやれ風に、風は諸國を吹き廻る
○門の豆藏（口まめに喋べるを藏とするを食）と鵐原雀（行々子）摺れて減らぬか舌びらが

○山へ〳〵と來る人たちに、少し田の草取らせたや
○レビユーガールが襠藏をはいて、お尻を振り〳〵踊りやよい

【俳百三十五】 雪中を行くに用ゆる藁製の長沓を安曇にて襠藏と云ふ。襠藏なるもの〻考案より始まりたるにや。

◎町の若い衆は大根の輪切り、色は白くも水臭い
○やーれ頭にや味噌玉よりも、穴が五つも餘計ござる
○破れ頭巾と世間の噂、たまにちよい〳〵耳かゝる

○色は白くも烏川生れ、小石々々（戀し〳〵）で黒う（苦勞）する

○人にや云はれず岩城の淵（陸郷村小丸山の麓に在り）の、深い思ひで氣が沈む

○高瀬眼のあの胸のうち、小石々々で沈み勝

【俳百三十六】　烏川原の小石は其色悉く黒し、乃ち烏川の名ある所以、また高瀬川は急流なれば其の鰍は腹中に砂礫を含み押流されぬやう身を沈めて居ると云ふ。

○軒の梅をばか附けに通ふ、梅が散るなりや何をかづけ

○燃ゆる想ひの須砂渡の鄙蹊、君に一と枝さゝげたや

○若しか思ひのかなはぬ時は、馬籠尾へ這上り鬼となる

○情冷めたい石地藏様を、蔦は絡んで紅葉する

○燃ゆる思ひのあの蔦紅葉、抱いて離さぬ石地藏

○わたしや安曇の野に立つ松木、君を待つ氣で立ちあかす

◎來るか〳〵と驚を見れど、今日も駒鳥なくばかり

◎聲はすれども姿は見えぬ、主は萱野のきりぎりす

○主は松川（待つ）わたしは池田、間も川原で松ばかり（待つ）（相も變らで待つ）

◎さぞやさぞ〳〵さぞ今頃は、さぞやさぞ〳〵待つであろ

○ちよいと會染（地名）つい深くなり、今ぢや浮名の高瀬川

○逢瀬數々數重なりて、流す噂の高瀬川

○忍ぶ岩間のちよろ〳〵水が、情梓の川となる

◎好いた水仙好かれた柳、心石竹氣はもみぢ

○小石々々の間に咲いて、妻となるかやあの山葵

◎主とわたしは川ばた柳、みすに離れちや暮せない

○主とわたしは谷間の雪よ、積もり〳〵て深くなる

○胸の中村（北安陸郷村）戀故曇る、逢ひに生野（東東川手村筑）は川向ふ

◎お前行くならわしをも連れて、東や上總の果てまでも

◎心意氣さへ屈いたなれば、逢ふは五年に一度でも

○うまい言葉に乘被ケ岳、もゆる思ひは鏡ケ岳

○顔はぼたもち手は豆餅で、主を尋ねて黄紛餅

○主は淺間（地名、温泉で知らる）でわたしは深志（松本の舊名）丈も立たずに片思ひ
◉梯子かけても屆かぬ時は、空の星だとあきらめろ
○矢竹笹竹思ひの丈は、錄で切られず思ひ切る

○主さ行くかえ安曇を捨てゝ、安曇野末にわしを捨てゝ
○安曇野末にお前を置いて、よそへ行く氣に誰ならず（誰が成るもの かの意）
○かねて覺悟は下堀なれど、様に引かれるうしろ髪
○名殘り惜しさよ此宵の座敷、鳴くな鶏あしたまで
○幼馴染に別れる時は、曇る常念涙雨
○假りの別れで又逢ふ事の、有りと思へど袖時雨
○君と別れの涙の雨か、見れば黒澤（南安、小倉村）曇りがち
○涙雨かや空飛ぶ鳥も、ないて別れる烏川

○心殘りの有明山に、つらい別れも金の爲

○君を送りて佐野坂峠、水も別れる北南
○名殘り押野の橋から見れば、山も雲間へ出て招く
○妻は出て行く乳呑みは殘る、秋のさ中に雪が降る
○去りし女房の大きなでんぼ（形の良く無い足）麥を踏む度び思ひ出す
◉廣い狹いと吾が居たとこを、今はよそ目で見て通る
○泣いて別れて涙がしみて、色に出たよな草もみぢ
○袖澤（北安）越す時や峽間の霧で、又も袂をしめらせる
○霞む鉢伏（山名）えゝまゝならぬ、諏訪と安曇は裏表
◉切れてしまへばら〳〵扇子、風のたよりは更に無い
◉空を飛ぶ鳥もの言ふならば、たよりを聞きたや聞かせたや

○花は散る〳〵踊子は歸る、諸業無常の鐘のこゑ

◉諸業無常と鳴る鐘悔くや、鐘の鳴る度び花が散る
◉わしが死なうと誰泣くものか、山の鳥が鳴くばかり
◉山の鳥もたゞ鳴きやせまい、墓の團子が喰ひたさに

○積もる思ひの落葉をよせて、焚けば烟に泣かされる
◉泣くな數くな日かげの紅葉、なんぼ泣いても日はさゝぬ
○月も宿らず汲む人も無し、木の葉がくれの谷の水
○主は岩檜葉わしやつりしのぶ、共に深山の日かげ草
○高瀬川原の眞砂の數は、數へ盡きても苦は盡きぬ
○雲の上なるあの白馬の、花となりたや次ぎの世は

悟道

◉獨り暮しは枯木に劣る、花も咲かなきや實もならぬ
◉後生願やれ爺さま婆さま、年寄り來いとの鳥鳴く
○綾にくるまり錦を着ても末は同じく芝頭巾

◉何が何でも牡丹餅や米だ、つける黄粉は豆の粉

◉月にむら雲花には嵐、とかく浮世はまゝならぬ
◉まゝにならぬとお鉢を投げりや、其處ら一面飯になる
○登り降りはアルプス街道、起きるころぶは世の習ひ
○岳の頭でわが袖はたき、積もる浮世の塵を掃ふ

樂天

○軒のすゞり（直氷なり、乗氷また氷柱に同じ）に月影させば、おらが藁家も玉簾
○根さへ枯れなきや埋もれて居ても、春は世に出る蕗の臺
○時が來りやこそ白馬岳の、雪の中でも花が咲く
◉花も舞ひ込みやお月も覗く、果報寢て待て破れ窓
○破れ窓をば覗いて呉れる、春の訪れ梅の花
○内はせまくも天地や廣い、廣い天地や戸口から
○鈴や太鼓で春駒舞はす、厩で屁こき馬目を廻はす

【解百三十七】 安曇で春馬と云ふのは春駒のことで、昔は童子の春の遊びの一つであつたなれど今は春先き各戸を廻る一種の乞食藝人、着飾つた女の子を恐ろしく賑やかに囃し立て乍ら舞はしめるのである。昔は兩足の間へ馬の首の形したものを置き、馬に跨りたる身振りしたるも、今は其の事無し。但し手に持てる鈴は馬の首に附けたる鈴の心なるべし。

祝賀

○主の壽や蓬萊山に、遊ぶ鶴亀千代の松

◎沖の島山蓬萊山へ、珊瑚瑪瑙の寶船

○武運めでたく故郷へ錦、飾るお主が身のほまれ

○此宵目出鯛手樽の酒で、祝儀するめ苧よろ昆布

○芽出度芽が出て咲く初花に、とまる蝶々の程のよさ

十一、生活

貧乏

○夏は重寶だおらあばら家は、蟬が來て鳴く床柱

○屋根は屑屋で穴さへ見える、穴に熊蜂巣が見える

○えさをたゝんでけみやにしこりや、おえの眞ん中でごいそ切る

【解百三十八】 安曇方言、えさは居宅、けみやは納屋、しこるは引籠る、おえは廣間、ごいそは牛馬飼料の豆木や藁などのこと。

○此年や不景氣お盆が來ても、ゆかた一枚着らりやせぬ

○高い山でも越しよで越すが、越すに越されぬ盆と暮

○越すに越されぬお盆と晦日、娑婆に暦が無けりやよい

○隱れ蓑笠若し有るならば、盆と暮とにや借りて着る

○白馬おろしの身にしむ頃にや、金も無くなる米も無い

○夜毎日毎に寒さはまさる、質を受け出す金は無し

○なぜか師走は吹く風寒い、寒い筈だよ錢が無い

○うちの寶は子寶ばかり、暮の勘定の間にや合はぬ

○豆で居るうちや容赦はせぬと、味噌を突くよに責めはたる

○まめで居ります腹減つて居ます、送り下され米と味噌

○越すに越されぬ年の瀬越して、見れば貧乏神や先き廻り

○藥の軒端に過ぎたるものは、くぜる日雀と梅の花

○慶長檢地の芝刈り樣が、今ちやぼろ着て草刈りだ

【解百三十九】 慶長十九年はじめて檢地即ちお竿受けあり。其れ以前よりの百姓を芝刈り又は芝切りと稱し身分により數戸の門屋を有つことを許された。門は即ち芝刈りの家來である。戸田侯の時此の制は廢せられたが、其れでもなほ封建の習ひとして後世まで庄屋、組頭、長百姓などは自家の仕事に村民を使役する事を許されて居たと云ふやうな次第であった。彼等村役人に付手當とか俸給とか云ふものが無かつた代りに人民使役を許されたのだと云へば其れまでなれど、是れ實は昔の地頭、小さなお殿樣の遺風を多分に殘した所の制度であつたのだ。其の爲に一般民は公けの御用や、此等村役人の使役の爲め一年の三分の一は費されるの例であつたと云ふ。今伊那の或る地方などになほお館、被官と云ふ相對的社會組織が殘つて居るとか云ふが、蓋し安曇の芝刈り、門屋に當るものであらう。なほ檢地は其の後は慶應四年、承應二年と段々にあつたこと人の知る所である。

職業

○越後屋根屋と燕の鳥は、春に出て來て秋歸る

○天保錢ばか潰して居ると、仕舞にや鑄物師屋罰ア當る

○酒屋働きを亭主にしたら、冬も布子に用が無い

修身

○晴れた大空男の心、雲の徂徠は雲に問へ

○親の意見と白馬おろし、夏の土用でも身にしみる

○親の意見とわさびはきいて、根からううらまで無駄が無い

◎しんぼして見ろしんぼがおもだ、廻る車もしんぼから

齊家

○おらが身上と笨山子の笠は、穴がたんとで骨折れる

○さても貧すりや團栗眼、閉ぢて遺繰考へる

○米を取る田に桑の木植ゑて、米は喰ふ氣か喰はぬ氣か

○稼ぎ盛りをぶら〳〵してりや、糸瓜野郎だと笑はれる

○露を分け〳〵刈る朝草の、つらい勤めで袖しぼる

○たんす長持や幾棹來やうが、たんす長持や野良へ出ぬ

○きじら苦にしるみやまし蟇だ、今にこげたま貯めるづら

【解百四十】 安曇方言、きじらは爐邊の薪置場、みやましは勤儉、こげたまは徹底的に、十分に、

澤山に、づらはだらうの意味。

○信濃富士（有明山の異名）ほど俵を積みて、歳の高瀨（川の名）を樂に越す

○うちは狹くも胸もと廣い、人にたよらず立つ烟

興世

○十個、勘左衛門、矢原の堰で、黄金渦捲く水が來る

○矢原彌三郎はりつけ柱、立てゝ開いた矢原堰

○十個伏越筑摩の水を、引いて安曇の稻實る

【解百四十一】 文化十三年五月十ヶ堰開通す。此の大土功に於ける鄕土的恩人は吉野村庄屋岡村勘兵衛、穗高町庄屋白澤民右衛門、下堀金村庄屋平倉園右衛門の息六郎右衛門、柏原村組頭より庄屋及び長百姓を歷任し後等々力村起し庄屋を兼ねたる中島輪兵衛の四名、及び役柄として大庄屋柏原村等々力孫右衛門の代理其の息孫一郎であつた。初め彼の四名が、計畫發表前に人心騷擾せんことを憂ひ或ひは茸狩りに或ひは魚釣りに變裝し又は夜陰深更を以て地形の踏査を爲したりし苦心や、繰返し出願すれども寧ろお叱りを蒙るに屈せざりし勇氣、愈々起工後は專ら土工及び人夫の指揮に當れる勘兵衛が其の采配宜しきを得、また資金枯渇して支拂ひ困難に際するや大きな財布へ石を入れて提げ歩るいて見せたなど云ふ膽略奇智、又民右衛門が關係十個

村（成相組にて成相町、新田町、長尾組にて上堀金、下堀金、保高組にて保高町、保高、等々力、矢原、吉野、柏原）及び加勢の上野、松川、池田三組の人夫に對する一切の賄ひに心魂を碎きたる顚末等實に涙ぐましきものであつた。又平倉六郎右衛門は（小谷平倉の城主飯森十郎春盛の後裔と云はる）寛政十二年勘左衛門堰の再興に非凡の手腕を稱讃せられ鹽川原堰其の他をも成工したる人であり、又中島輪兵衛は寛政年間數回に亘り松川組より櫟苗を取寄せ其の地に天蠶林を仕立てしめ、文化年間には又中島平十に勸めて塚原新田二百町歩を開かしめたる人、即ち此の兩名は十ヶ堰開鑿に當り其の專門的技倆を以て測量設計に任じ大功ありたる事察するに餘り有り。されば此等の人々當時何れも藩主より厚きお褒めと優遇とを授けられたるのみならず其の後も屢々重賞を受けたのである。降つて大正六年等々力孫一郎一名に對し辱くも從五位を御追贈あり、聖恩枯骨に及びたる次第であつたが、吾等は其處に其の功績の更に偉大なる他四名の有つた事を想起せねばならぬのである。

勘左衛門堰は貞享二年、代官二木勘左衛門の努力により成工、愈々通水の時島内村青島なる蛇腹マチにて決潰、勘左衛門責を引いて時を移さず自害、人夫之に激勵せられ、人家の疊を奪つて決潰個所を塞ぎ遂に通水せしめたりと云ふ悲壯な逸話が殘つて居る。此の堰其の後も通水兎角不完全にて屢次改修を要したるが寛政十年下堀の平倉六郎右衛門が努力以來完全通水して今日に至る。

矢原堰開鑿にも壯烈な物語が殘されねばならなかつた。即ち正保、慶安の頃、臼井彌三郎な

る人、毎回の堰（せきぶしん）を請功を成さゞるを見て悲憤に堪へず、新堰開鑿を強訴すること幾回なるを知らず、藩役人遂には之を煩（う）るさしと爲し重ねて強訴するに於ては重刑に處すべき旨申渡す。彌三郎何條ひるむべき、栗の木にて磔柱（はりつけばしら）を造り之を工事困難と見らるゝ個所に押立てつゝ訴ふること愈々切なり。さすが藩役人も遂に根氣負けして兎に角之を許す。功愈々成りて水通せず、役人大いに之を罵る。彌三郎心既に決する折から一天忽ち墨を流したるが如く雷鳴殷々、豪雨車軸を流して到り通水滔々、萬衆歡呼して止まなかつたと云ふ。其れが承應二年五月二十一日であつたので、年々此の日を以て村民が彌三郎の靈を祀る慣ひであつた。其の磔柱なるもの細萱正覺院の北に樹つて居たが將さに朽ち去らんとし祭祀も怠り勝であるとは遺憾である。抑々今の人、お互に其の生活の幸福なるを誇り得るは總べて是れ先人が犧牲苦心の賜なることを忘れ勤（やい）もすれば自分一個に屬する權益のみを主張して尺寸の地、一口の水をも之を爭ふ、誠に情無き風潮で、別に先人に習ひつゝ其の地を廣め其の水を增し、以て問題を解決するの道あるを思はず、或ひは之を思はざるにあらざるも其の犧牲を要するを厭ひ、甚しきは濫りに階級相憎むの勢を煽揚する事などを以て社會を改造する所以なりと强ふるに至る。凡そ先人が民生の豐樂を期すべく如何に犧牲的努力を拂つたかと云ふやうな歷史は今の人は聞くを欲せず學ぶを好まざる所なるやにも見えるが、斯くして人々皆其の個々の私利をのみ爭ひ犧牲的道義心の枯渇する時、堰は荒廢に委し田は野と化り爭亂絶ゆる時無く民生倒懸に苦むであらう。只に農業の事のみならず政治、軍事、通商、學藝、思想界の事、總べて此の道理に間違ひはあるまいと思

ふ。願はくば我等子孫に遺されたる彼の先人の教訓と功業とを荒廢に歸せしむる勿れである。

十ケ堰は奈良井川（ならゐがは）の水を引き梓川を橫斷するものであるから梓川の流勢に影響さるゝ不便あり、大正三四年燒岳の噴火後は梓川に砂を押出し困難は愈々倍加した。よつて大正五年伏越工（ふせこし）事出願、鐵筋コンクリト管の內徑十尺、延長百七十二間、梓の川底より平均九尺以下に埋設、總工費十六萬七千圓、大正八年九月七日起工、九年五月に通水した。水利組合長黑岩重義、工事委員岩原愛作、上條助市、中島新一、丸山嘉市諸氏の功績は特筆すべきものであつた。

○松の木立の眞ん中にちよいと、禿げた岩原坊主山

○松を植ゑたら離（はな）れ山の、坊主頭に毛が生へた

○尾根に道あり凹（くぼ）みにあらし、山で名題の一の澤

○山の裾まで新切を起し、二男三男分けて出す

○小倉林の開墾畑、上納要らずの蕎麥の花

○高瀨赤芝（あかしば）時節が來れば、芝も花咲き籾が實（な）る

【解百四十二】 鄕土第一の暴川（あらかは）として有名なる高瀨川の沿岸、殊に曠漠たる其の右岸卽ち西側の赤芝原（地籍の關係上細野原とも云ふ）を良田と化すべく着眼されたのは決して昭和の今日に始まらず、一例を擧ぐれば約二百六十年前赤穗義士討入りで知られた元祿十四年の正月と云ふ

に、板取村などよりも左の如き願書が出て居る。「松川組板取村の東に綱野村の野原御座候。南は林中山道、東は高瀬川、北はかすがうし林、西は板取村野原道、此の間にて田畑高五十石目年季五ケ年の内切起申度候」云々。斯く高瀬川の西は藩の石高増加の政策と相待つて續々新切願が出たので寛保三年八月には藩士山本平八郎をして上流なる鷲巣原、木中原と共に檢分調査りせしむるに到つたが、天の時未だ到らず、此れより前數年、元文五年高瀬川氾濫して松川村樫原東より切れ込み、寛保二年又同所へ切れ込み、赤芝原には其の度び砂押し被害甚しかつたので、右寛保三年の折角の願張りにも係らず、御新切御免願を出すと云ふあべこべの事になつてしまつたのみならず、其の後年々打續き困難なる川除普請の負擔仰付けられるので、板取、綱野兩村の間に其の普請の丁場割に關する大出入が持ち上がり五十年以上に亘り紛爭が續けられたが、特に寛政四年七月治岸見廻りの役人津村銀右衞門、北村籐太夫を案内の區域爭ひより本格的の公事となり、所謂お上の政策と利害相反する板取の申條は常に不利の立場に置かれ、寛政九年二月其の村民の氣力遂に盡き、お上御威光の前に兜を脫いで濟み口となるまで六年間を要したのであつた。今日現代の餘德、高瀬川が國庫補助河川となり、協調平和の間に絶對安全の石堤が出來、赤芝原も其の名を哀切るべき青田續きとなりつゝあるを見るに就ても、先人が此の川の爲めに如何に苦勞を重ねたるかな思ひ、感慨轉た禁ずる能はず。

○共に精を出し豐かにすれば、淨土極樂娑婆にある
○御代は治まれ仲好くまるく、俺等が踊の輪のやうに

十二、時　候

○櫻三月とは暦だけ、安曇平にや殘る雪
○春は名ばかりアルプス山も、笑凹〳〵に殘る雪
○山のはざまは春とは云へど、笹にさら〳〵降る粉雪
○麥が取れると思へば嬉し、安曇野に降る春の雪

○殘る雪かげまだらとなりて、日本アルプス花曇り
○春が來たとて深山の笹も、雪のふとんをはね退ける
○雪のふとんで寢た爺ケ岳、春は淺葱でころび出る
○山にや殘りの雪さへあるに、里は櫻の花盛り
○日かげ山にはまだ雪やあるに、日なた山には蝶が舞ふ
○春は舞ひ立つ蝶々ケ岳の、蝶に貸せたや花の枝

○岳は白雪端山は櫻、里は霞が七重八重

○花の蔭から山々見れば、峯の白雪や枝の上

○里で散る花麓でさかり、山の上ではまだ蕾

○峯の石南花、麓のつゝじ、五月安曇の花ざかり

○花が葉になりや大洞山（北安松川村）の、木の間にて啼くほとゝぎす

○春の安曇野花田が續く、花の中から揚げ雲雀

【解百四十三】 綠肥としては田と云ふ田に紫雲英（げんげ草、れんげ草、又はぢやうめ草）を播いて置く。陽春五月、其の開花期は眞に壯觀、安曇野は一面の花の海となる。之を花田と云ふ。所が昔は此んな事では無く、山から新綠の梢、所謂苅敷ぼやを取つて來て足のうらで一々田の中へ踏み込んだもので、其の新ら踏みが又多くは婦人の仕事となつて居た。當時足のうらの皮が破れる、其れを柳や藤の生皮を以て捲き立て乍ら毎日苦痛を忍んで作業を繼續した事を思へば彼の信太郎ならずとも誰しも鬼と同樣であつた。此等の苦勞は今時の四十歳以下の若い人々には想像も出來まじく、其れ程までにして昔の人々は子孫の爲に今日の幸福な社會を生み出して呉れたのであるから、其の義理を思はず骨惜みをして屁理窟ばかり列べて居る人たちが有つたら實際劍が當るのである。

◎誰か行かぬか馬羅尾の奥へ、土用の半ばに雪を取りに

【解百四十四】 巨人傳說で有名な松川村馬羅尾は昔は御領主の御山で、今でも松川村々有林の奥

は國有林である。之に入會（いりあひ）を許されて居たのは松川組のうち五個、松川、板取、細野、鼠穴、神戸（但し神戸新田は慶安四年に興り承應二年に御竿請け）、池田組十五個、十日市場、內鎌新田、林中、池田町、半在家、花見、相道寺、瀧澤、澁田見、鵜山、中の鄕、上押野、下押野、鹽川原、荻原、及び穗高組のうち一個、狐島であつた。又此處にて樹種、數量、期間を限りて伐り出し、筏と爲して川中島に送り賣却する事などが許されて居た時代が有り、特に接近部落たる下松川、板取、鼠穴（時として細野を以て鼠穴に代ふ）の三個には色々特典も與へられて居た。但し山中にて「御巢鷹有之候はゞ其の近邊柚取並に人足よけさせ早々注進可申候事」など封建時代の面目躍如たるものがある。後西院天皇の寛文年間には此の入會の境立（さかひだて）に就て大騷動が持ち上つた。其れは約（つま）めて云へば大鄕たる池田組十五個が暴力に訴へて山に近い松川組五ケの特權廢止即ち入會平等を既成事實化せんとした事であつて、寛文十一年三月四日御奉行のお裁きで妥協解決した事にはなつたが、內容は全然池田組の成功に歸したのであつた。當時松川、板取、神戸三ケよりの訴狀に曰く「＝一、池田御組手代（著者曰く慶安二年二月水野忠職の時組手代制を設く、後享保十一年戸田光慈松本入部、翌十二年組手代を大庄屋と改む）十次郎殿、人數五六十人に道具迄持せ召連＝熊手鳶口木刀迄持參候御事＝神戸上原へ參ひかへ被居申候而八百人の人數に下知被仕候故、池田組之衆彌々我まゝ仕候儀被仰付（罪科に仰付けられたしとの事）可被下候御事＝一、八百人のちやくとう（到着である）と申、池田町十次郎殿御意而參候間、松川組之者共五人も六人も打こゝし其の場にいけ（埋め）さかい（入會の境なり）にい

たし候へと十次郎殿御意と申候故、松川御組手代其段御聞被成、池田組大勢當方に而かゝり（抗爭）候者あやまち（死傷など）でき可申候間出合不申候樣に被申候故、引（退き）申候得ば、かり敷（緣肥としての若枝等）もや（今ぼやと云ふ、燃やすものゝ意で、細枝など集めたる薪の事）付出申候に付（池田組の者が馬に附けて出發した事）右の山主ども（松川方なり）迷惑がり馬の口にすがり申候得ば、大せい立合打たおし半死半生に仕候故、右の山主共耕作罷成間敷由申候。御檢史（使）迄被仰付可被下候御事＝一、同二十九日に板鳥村（板取村に同じ）左五兵衛下人二人門之丞と申者、小葦間山（馬羅尾のうち）へ御上げすみやき（御上げ炭燒の意不明、上納すべき炭を燒く事か）罷在候へば、池田町之かち（徒歩の意にあらず、安曇方言、山稼ぎする人の意、山人など云ふに同じ、解百四十九參照）半三郎、新之丞、左五兵衛、伊兵衛、此の外四人以上八人參（り）ふみたおし、ゆき（斧）三丁取申御事＝右之條々被聞召分、先季（先規）之通に被仰付可被下候以上」。又濟み方となりお奉行樣に差出したる文書「一、先年は小は（あ）しま澤かゝり池田組、本澤かゝり當組五ヶ保高組狐島村右入會之處、二の澤一の澤ゆど是は板取村内山也、寛文十一年寅之三月四日（より）當組五ヶ池田組十五ヶ保高組狐島村入會也（全部平等入會と改めたるの意）、右板取内山御年貢は池田組に而御上納仕候、御山之神樣（よしどやの山の神なり）寛文十一年迄板取村に而二ツや神戸神主は神太夫殿に而祭禮仕候（此の文に據れば二屋神戸は當時板取部落に入りたるか、今は松川部落に入る）。其の後は五ケへ差出し申候」云々。此れほど爭つた馬羅尾山であつたが、其の後池田組等は土地隔の爲、

入會を脱退し、今は大略小あしま澤を堺として、其の奥なる本澤かゝり以上は全部國有林、其處より口元なる一の澤二の澤よど澤（前文のゆど）等は松川村有林となり、只其の村有林入り口に巨人傳説の信の宮有り（一名埴澤の山の神、解説百〇二、參照）其の周圍に元池田組のうち今會染村林中の人々少許の地を有するに過ぎず、其れでも今なほ狐島山道とか林中山道とか古い道の名などが呼び殘された個所も有るなど、時勢の變遷が忍ばれる。兎に角狐島とか又は鹽川原、荻原など云ふ安曇平の東側、しかも押野崎の裏側に居た人々までが、二里三里を遠しとせず、此んな西側の山間まで苅敷やぼや取りにやつて來た昔の人の眞劍な努力を思へば涙無きを得ないでは無いか。

○南瓜からんで手水場（便所）ゆがむ、直す間も無い蠶時

○夏は白馬や木崎のうみに、小町業平避暑に來る

○夏の安曇野東が白みや、登山電車が北へ行く

○日本アルプスあの雪を見れば、扇子たゝむよ電車窓

◉盆にやごされよお盆にやごされ、佛樣さへ盆にや來る

◉お盆〳〵と待つうちやお盆、お盆過ぎれば何を待ちる
◉お盆過ぎれば草刈る野山、草に蜂や居てチクリ刺す

秋

○里で黄金の浪打つ頃は、山も紅葉の錦を織る
○情冷めたく降る秋雨に、山の紅葉はなぜ燃ゆる
○肩を叩いて振り返らせて、秋の木の葉の暇乞ひ
○落葉焚いたらどんごろ（團栗）はぜて、飛んだ所があつ〳〵のつ
○おらが高帽は昔のもので、時雨くらおちや色さめぬ
○唄ひ通せば霜枯れぎすの、こゑも切れ〳〵秋の風

冬

○積んだ焚きものえさ（居宅）より高い、安曇山家の冬ごもり
○でかいゆるり（圍爐裏）でででかい梢焚いて、でかい話で藁細工
○日髪頭に榾火のほこり、積もる四ヶ庄の冬籠り
○障子細目にアルプス眺め、寒い風だとハクションする

○あけりや寒いしたてれば暗い、煤け障子の張りかんば

十三、農　作

苗代

○八十八夜は種まき盛り、霜を案じる九十九夜
○雪のアルプス代田にうつし、山の上まで種をまく

花田

○安曇十五里たゞ一枚で、敷いたれんげの花むしろ
○ごろり寝からかすちやうめ草の中へ、空で日一歩雲雀鳴く
○誰が蒔いたかあのちやうめ草、田からこぼれて畦で咲く

借馬

○東山中で生れた馬も、五月馬市里へ出る
○五月馬市大町行けば、ヒヽンワンワン馬だらけ
○五月借馬電車におどけ（驚き）、跳ねるあだける（あらびる）荷をむくる（顚覆する）
○昔からだよ水内の駒は、五月安曇で苦労する

馬耕
◎馬耕のあとから娘がこぎる、こぎる其の手に豆七つ

牛休み
○五月てきなや（疲労の意）暫休みしても、夜は小早やに寝とござる

代
○代の車に乗るお若い衆、下手に乗るなよ口車

田植
◎五月田植にや皆菅笠で、姉か妹か解りやせぬ
○負けて恥かし田植の時にや、赤いたすきの後になり
◎やーれお十七初めて田植、よけろどんびき邪魔になる
○口の早さよ苗挿す遅さ、菅の小笠に尻を押さる
◎田植盛りにや泣く兒を欲しや、畦に腰をかけ乳を呉れる
○きりやうの悪いのが揃たと思や、今日の早乙女男ばか
○今日の早乙女野郎ばか揃た、でかく頼むぞ胡麻むすび
○百姓急がし仕付の時は、なりも姿も見らりやせぬ
○やこめ爺が又愚痴をこねる、田植時ばか嬶欲しや

農休み
○みんな精を出し田植をすませ、踊りましよかえ農休みに
○踊れ農休み紺雪ばかま、白地手拭赤だすき

後田
○口の鐵砲でたアと畦からまくる（追ふ）、麥の後田の群雀

田の水
○人の田の水うらやむよりも、止めろわが田の穴漏り
○先祖代々ぬるめの口に、あてた止め石を盗まれた
【解百四十五】水を本田に入れるに先ち、日光による温度を與へるべく暫く溜へて置く田をぬるめ（温め）と云ふ。

田の草
◉小田の蛙の鳴く音も憂しや、早く田の草取れ〳〵と
○並ぶ菅笠田の草取りの、背中かすめて飛ぶ燕
○畦のよしきり田の草取りと、負けず劣らずべちやくちやと
◎同じぼろ着て田の草取れど、見ればお十七や腰細だ
○田草取る娘の汗かく顔に、赤く染まりし笠のひも

○着蓆赤すげ（赤菅笠）降り照り知らず、いつも放さぬ田草取り
○背なに青ん葉腰には火繩、七つ道具で田草取り
○蠶は横這ひのけさは背中、田草取る子は四つん這ひ
○百姓田螺か泥田の中を、日がな一日這ひまはる
○日日毎日田の草取りで、頭上がるとこ見た事ア無い

◎腰の痛さよ青田の廣さ、一兩四貫の日の長さ
○拂ひ田の草塗り附け乾せと、青葉隱れの鳥が鳴く
○さてもできなや田の草取りは、稻の株つを杖に突く
◎朝の五時から田の草取れば、お日の入りには腰や立たぬ

○おらが畑に實りたる南瓜、おらが喰べるにや錢や要らぬ
○南瓜ぼちや〳〵ぼちや〳〵南瓜、南瓜ぼちやの〳〵土手南瓜
○三本小屋でも南瓜が絡みや、花も實もある其の眺め
○夜さり來て見りやタ顏畑、花は見ゆれど葉は見えぬ

○お月や出た〳〵お月に出られ、南瓜盜人身を隱す
○安曇踊と南瓜の花は、夏にならねりや實が入らぬ
○安曇踊とタ顏の花は、晝はつぼんで夜開く

○山中やまなか姿振りを忘れ、主と二人で蠶飼ひ
○四方山でも安曇の里は、米や蠶で札が降る
○別れ霜から初霜までは、安曇平の蠶飼ひ
○蠶棚には春夏秋と、黃金白金花が咲く
○蠶せはしや春夏秋と、娘盛りもたばね髮
○立つちやしやがんぢや又立つちやしやがみ、休む間も無い蠶時
○夏の安曇は蠶の棚の、圖の山から夜があける
○夏蠶上げれば米味噌背負ふて、科野坂越し中房へ
○蠶飼つて見ても百姓して見ても、元屋元助酢やたまり

烟草

○たばこ畑で手は脂だらけ、さがる前髪を其のまゝに

○煙草畑に吹く風惜しや、出來ぬものかや箱詰に

○たばこ買ふ錢を持たない時は、たばこ畑で息をしろ

草刈

○東ア白んだ草刈り行かず（行かうの意）、ぶよは居ないし鎌切れる

○朝の草刈りや樂では無いぞ、疝氣や起きるし腰や病める

○馬の尻ツぺたへと虻三つ四つ喰ツついて、小場（駒場か、山間の小平地）であだけて荷がつかぬ

○岳に朝日の輝く頃は、駒に若草附け下る

土方

○石を枕に土方（土工方の意か）の晝寢、いびき高瀬の土手のかげ

○高瀬土手のかげ土方のひる寢、蟻子這ひ込む鼻の穴

○天氣好い日は土方に出るが、雨の降る日は藁細工

○晝は土方で夜は夜なべして、これで喰へなきや化けて出る

案山子

○角屋新切穗が出揃へば、えらい顏して立つかゝし

【解百四十六】角屋新切は池田町素封家角屋關氏の高瀬川西、赤芝原續きに於ける開田である。拵へ方が設計通りで無いのか收穫の點に就き小作者が愚痴をこぼして居る。近頃其の數町北方に折松新切が出來た。板取の名家折松一柳英雄氏の開田であるが之れは素晴らしい出來方である。因みに英雄氏は南安十ヶ堰開鑿に知られたる岡村勘兵衛の家に生る。土功に關する傳家の六韜三略も有るであらうか。

○黃金渦捲く稻田の中で、かゝし鼠の子を孕む

○さても五作によく似た案山子、似てる筈だよ五作だもの

◎主に逢ふとて裏から來たら、畦の案山子に瞰まれた

○秋もすがれた神明沖に、畦を枕で寢た案山子

收穫

○神の力で乾したる海に、黃金浪打つ稻の出來

○穗浪ゆたかに黃金の風が、安曇十五里吹きわたる

○黃金渦捲く折松たんぼ（解百四十六參照）中の小島は十郎松

○穗に穗、穗に〳〵穗に穗が咲いた、籾が取れるぞおらが里

○秋の夕日はまねツくりを突いて暮れる、月夜あかりで庭じまひ

【解百四十七】 人が顚倒する事をまねツくりを突くと云ふ。日が短くてまねツくりを突いて居る間にも暮れてしまふとは此の郷土で常に云ふことである。何にしても西に高山が連亘するので此の地方の日の入りの早いことは特別製である。庭じまひは、晝間庭に乾した籾の俵へから俵入れを云ふ。

○取れた御禮にや地主へ年貢、お天道様へは言葉だけ

○年貢はかりて殘りし二俵の、間へ親様寢せ申す

○わしのお守りや片倉様の、倉でこぼれた籾の粒

【解百四十八】 北安松川村に鹽訪片倉組の支店があゝ。天下に知られた松川米が此の支店へ年貢として莫大に納められるのである。成る程其の年貢のおこぼれを頂戴して御符としたならば其の御利益でよい身上を作り得るかも知れぬ。但し酒を飲んだり賽島などを吹かゝ仕事嫌ひの遊び好きでは何うかと思ふネ。

○穗屑こなしでべえた(俵)とべえた、あたり合ふ時や手がしびれ

○寒むや北風つめたや時雨、安蔓少女の穗屑たて

○秋の取入れすまないうちに、槍や穗高は雪に寢る

○春は柴刈り鍋背負ふて行かず、獨活やわらびに落し味噌

○柚小屋では汁鍋かけて、入れるうどの芽摘みに出る

○鎌と鉈有りや暮して行ける、まめで達者でまた山稼ぎ

○山で木を伐るきこりでさへも、花の咲く木は伐りかねる

○馬羅尾の小場にて晝寢をすれば、烏つけ廻す空メンバ

○繩が無くなりや藤蔓たぐり、薪を束ねてしよひ下す

○笹葉まじりの柴刈つて來たら、里でみそツちよ(みそさゝいに笑はれた

○穗屑儲けの小作ぢや食へぬ、秋がすんだら山稼ぎ

○風の吹く日の萱刈りやつらい、萱で手は切る風しみる

○今日もがち山日んがら一日、雪は降る〳〵手はかげる

【解百四十九】 がち山は又かち山で昔話の題となつて居るかち〳〵山に同じ。乃ちがちは稼ぎで山稼ぎする事をがち山と云ひ、またがち山する人が古語の所謂山がつである。

○はアて雪ア（霰雪）や來りや烏さへ鳴かぬ、今年やおしまひ山仕事

炭燒き

○山の奥でも煙草の火には、事を缺かずに炭を燒く
○炭はやけども燒餅や燒かぬ、二人仲好く山住ひ
○馬羅尾の山奥炭やき住ひ、背戸にや松風岩清水
○東山でも俺らよな野郎が、炭をやくのか烟が立つ
○馬羅尾の炭やき五日に一度、里へ出て來る酒買ひに
○わたしや奥山谷間の小鳥、たまに逢ひます炭やきに

○山の中でも炭燒やえらい、太い烟で世を暮す
○わたしや炭燒、紅葉の山を、心ならずも曇らせる
○西の山には炭を燒く烟、東田澤にや瓦燒き
○親の代から炭燒やしても、腹の中まで黒か無い
○秋がかたつきや西山さして、素人炭燒やそろ〳〵と

○はアて雪ア來て增えたるものは、山で炭を燒く烟の數

藁細工

○雪に埋もれた安蔓の在所、彼の家此の家の藁たゝき
○日向ぼツこで以て藁細工すれば、藁は乾ぐし目はとろい
○圍爐裏取りまき大火を焚いて、冬の三月を藁細工
○冬の夜なべにや長物語り、繩に綯ひ込むしやり〳〵と

雜

○俺らがでんぼは村一でかい、麥を踏む度び賴まれる
○本家新宅一枚畑、作り分けたる豆と蕎麥
○畑で別れた親芋子芋、めぐり逢ふのが鍋の中
○春は種まき馬耕代田植、夏は田の草腰ア曲がる
○秋は稻刈り取り込む俵、冬は藁細工手が凍げる
○何が何でもお百姓樣は、米の實る木の番をする
○米の實る木の番するからにや、初穗神樣次ぎや俺らだ

○雪の化粧のアルプス山へ、のぼる初日が紅をさす
○岳の峯だけ朝日がさした、安曇平はまだ夜中
○越した峠に入る日ものどか、空に夕焼け夕雲雀
○信濃富士へと夕日が落ちりや、押野崎からのぼる月

○庭は狭まくも安曇野續き、照し下されお月様
◎月の見頃は八月半ば、蕎麥の白花花盛り
○月のよい夜は水鶏でさへも、戸を打ちますポン〳〵と
○お月や照る〳〵木戸橋あたり、川(犀川)を見おろし夕涼み
○煤ぐれ提燈さげても暗い、お月をたよりに越す山路
○飛彈の空から二日の月が、安曇平をちよと照らす
○四の山の端あの三日月と、人の盛りは云ふ小間だ

◉お月様でも三日月や寒い、丸い十五夜見て踊る
○月の出頃にや踊子衆も、意氣な姿で辻に立つ
○月が雲間へちよと顔出せば、踊る娘衆顔隱す
○お月や照る〳〵涼しい月が、俺等が踊の輪の上に
○おらが踊の輪のよな月が、落ちて行きます飛彈の空
○裏は飛彈かよ山端へ急ぐ、月に言づけ頼みたや
○月が飛彈へと落ち行く頃は、安曇や夜明けで鶏が鳴く

○南瓜畑で立てたる風呂は、高い屋根だよ天の川
○アルデバランが山端に沈む、燃ゆる思ひの其の色で

【解百五十】アルデバランは星の名でアラビア語、支那では天高星と云ふ由。牡牛座のアルファ(すべて一星座中最大の星をアルファ、次ぎはベタ、ガンマ、デルタ、エプシロンなど希臘文字で名附けること、英字のA、B、C、日本のいろはにほへとなど云ふが如し)燃える火のやうな赤い色をして居る著明な星である。其れが山端に沈んで行くのは生憎と若う人の心惱ましき曉春五月の夕方と知るべし。

○槍の穂尖に三日月樣が、鎌をかけたる宵の口
○夜さり通れば青木花見穗高、閨に花浮くわさび畑
○夜道淋しや牧原遠く、見ゆる栗尾のお小僧火
◉月は傾く夜はしん〳〵と、心細さよ瀧の音
◎葭の葉摺れか川瀨の音か、夜更け淋しやさら〳〵と
○夜更け淋しや尾花の浪に、沈みかゝりし月の舟
○安曇平の夜はほの〳〵と、岳の雪から明けかゝる

十五、氣　象

雲

○天氣變るか有明山の、腰に結んだ雲の帶
○明日は雨降り鉢伏山の、雲も動かず日が暮れる
○四方曇りて夕立もやう、早く行きたや四つ谷まで

霞

○安曇野の末霞に浮ぶ、牛の背のよな山の數
○京へやりたや霞の絹に、崩ゆるわらびののしを添へて

霧

○小倉黑澤まいたる霧に、浮ぶ室山、松木立
○高瀨川霧晴れ間を見れば、池田八幡松の森
○山の朝霧谷から捲いて、屋根の杣小屋捲き殘す
○霧のだんだら橫縞がすり、派手な姿で鍋冠り

【解百五十一】　昔筑摩の鍋祭と云ふには再嫁の女子は鍋を冠って出て踊つた。三度四度の緣のもの は三枚四枚の鍋を重ねたと云ふ。今其の故事を聯想し乍ら鍋冠山（解十八、參照）に橫霧の棚曳けるを詠みたるが此の歌である。

虹

◎島川谷朝虹や吹いた、岳へ登るな川越すな
○降りし春雨夕日に晴れて、高瀨川原に虹の橋
○高瀨川原に立つ夕虹が、染めて見せたる進上松

雨

○四方の山々春雨呼べば、間の安曇野花曇り

○雨の降る日はかな〳〵蟬（蜩）が、日暮知らせる杣の小屋
○蓑を着りや晴れ脱ぎや又も降る、仕事手交ぜた村時雨
○神戸出ぬけりや枯野が續く、枯野小一里村時雨
○峯は雪降り麓はみぞれ、里は時雨でみのや笠

露

○一つ〳〵に月かげ宿る、草の葉末の露の玉
○草の葉末にやどれる露は、踊る拍子にはら〳〵と

霜

○日向山には頗白鳴くに、日かげ山には霜柱
霜が降る〳〵九十九夜過ぎに、百姓泣かせのおくれ霜

雪

○尾根は別でもあの白雪は、解けて一つの澤となる
○岳の寓年雪や安曇の里の、ひでり知らずの水のもと

○土用の日盛り一と皿欲しや、お花畑にのこる雪
○しめる北窓見果てぬ山に、解けぬ思ひの雪が降る
○破れ障子を泣かせる風は、白馬おろしで雪まじり
○白馬颪の持て來る雪は、破れ障子を越して降る
○雪は降る〳〵乳川は淀む、大洞山には雉子が鳴く
○雪は降る〳〵さて落ちぶれりや、常盤御前も權滅ばき（權滅は俳百三十五參照）

木花

○今朝の寒さに咲いたる木花、京へ一と枝送りたや
○冬の木花は一夜に咲いて、朝日あたれば露と散る

氷

○軒に三尺氷柱が下がり、五尺戸間口出られやせぬ
○南風吹きや氷も解けて、温むどんぶら蛙鳴く

風

○踊る娘のあの振袖の、袂ふくらむ春の風

◎昨日北風今日南風。あすは他國へ辰巳風

十六、花

梅

○うちは藁葺きにごらのよでも、春は庭さき梅が咲く
○娘見たさに軒端の梅を、咲かぬうちから來て褒める

櫻

○八重の花より一重の花の、色香ゆかしや山櫻
◉櫻花なら一と枝ほしや、かはい彼の子の目を覺ます
○わしもなりたや權現樣の、花の盛りを宮守りに
○道は無けれど花咲く頃は、小路やつきます山櫻
○里の櫻の葉となる頃は、深山櫻の花盛り
○殘る白雪まだらとなれば、咲くよ深山の遲櫻

辛夷（こぶし）

○殘る雪かやあの枝の先き、雪が香ろか花こぶし

桃

○先きに立ちたるやの字の帶へ、桃の花散るぼろ〳〵と

菜の花

○こぼれ菜種のさびしい花も、咲けば蝶々が來てとまる
○咲いた菜種に蝶々がとまりや、憎くや風めが振り離す

蒲公英（たんぽゝ）

○路に咲いたるくじな（たんぽゝ）でさへも、餘り踏まれりや横に咲く
○黃（き）なたんぽゝやがては白髮、末は坊主で世を終る

鄙薊

○雪に埋もれたあの山つゝじ、固い蕾で春を待つ
○春を待ち得たあの山の端で、岩に抱かれて咲くつゝじ
○岩に抱かれて咲く山つゝじ、咲くにや咲けども實はならぬ
○低い木振りで咲いては居れど、固い根じめの岩鄙薊
○固い根じめの岩間のつゝじ、引くにや引かれず見るばかり
○ギシキ八面籠もりし山の、春を彩（いろど）る鬼つゝじ
○畦にさしたるあの鬼つゝじ、苗間のぞいて水鏡
◉わたしや奥山岩間の鄙薊、遲く咲いては早く散る

石南花

○岩を抱寐に咲く石南花よ、山の奥にも戀は有る
○山の石南花眞紅の色も、盛り過ぎれば褪め易い
○解けぬ白雪根に持ち乍ら、咲くよ石南花岩のかげ
○道が有るなら彼の石南花を、取りに行きたや岩の上

藤

○しめて絡めば松木も枯れる、心無いぞえ藤の花
○枯らすつもりで絡むぢや無いが、松をたよりの藤の花
○藤がからめば枯木でさへも、枝に葉が出る花が咲く

芙

○裾のおんぼろなぜ引き止める、惚れて止めるか茨の花
◉野道通れば茨引きとめる、茨よ放しやれ日が暮れる
○咲いて出たとて誰見るものか、どうせ野末の茨の花

朝顔

○かはいさうだよあの朝顔は、其の日限りの笑ひ顔
○露の乾ぬ間に朝顔散りて、哇の寳顔蝶を呼ぶ

種々の花

○野邊のちご〳〵白髪の頭、風が吹いて來りや丸坊主
○哇の頭の薊でさへも、一度花咲く春はある
○眞夏咲き出すあの鳳仙花、燃ゆる唇紅の色
○いきな花だよ忍冬の花は、金と銀とに咲き分ける
○暗い谷間もあの鈴蘭の、花の香りで夜が明ける
○實れて行きます咲かないうちに、深山鈴蘭町で咲く

月見草

○月の無い夜は何を見て開く、梓川原の月見草
○月に呼ばれたかたんぽの土手で、返事をして咲く月見草
○かはいさうだよ闇夜に咲いて、晝間しをれる月夜花

桔梗　○淋し花だよ桔梗の花は、盆の佛へ手向け花
○萩や桔梗にや及びも無いが、きのこさし（小さな雑草の一種）にも花は咲く

蕎麥の花　◎景さ白船源右衛門澤に（白船温泉と金山平の間にあり）夏の雪かや蕎麥の花
○蕎麥の花咲く新切畑、蕎麥にまじりて咲く野菊
○お月や落ちても鹿狩山（大町の東）の、裾は明るい蕎麥の花
○月の無い夜もあかりは要らぬ、道の兩側蕎麥の花
○蕎麥の花咲きや鳴くきりぎりす、月の落ちたも知らず鳴く
○九月半ばに雪かと思や、あれは松川蕎麥の花

紅葉　○繼かあらぬか秋山見れば、漆はづかし櫨もみぢ
○峯の紅葉朝日がさして、中に常盤の松の色
○末は紅葉の錦を着るも、今は若葉のうす綠

十七、木　石

草木　○春の風吹きや山さへ笑ふに、思案投げ首出るわらび
○蒔いた種なら生えるもよいが、蒔かぬだべ草めた生える
○君に見せたやあの澤ばたで、化粧柳の水かゞみ
○馬羅尾の山奥篠竹伐りて、かごに拵らへ蠶飼ひ
◎お月を招いた薄も今は、世事にくすぶる炭俵
○風に吹かれてばら〳〵落ちて、澤へ流れる山の栗
○わたしや奥山谷間の雜木、花も咲かずに落葉する
○炭に燒かれりやあの白樺も、只の雜木で賣られ行く

岩石　○春の日永に安曇野通りや、みかげ石を切る鑿の音
○昔もカチ〳〵石屋がたゝく、此處は葦間の川のへり

十八、動　物

雉　◎何がつらいぞ今日此の頃の、笑ふ山端になくきじすら
雲　○馬羅尾の鷲乾いた喉を、しめす葦間の岩清水

○馬簾尾の鶯わが身は痩せて、雛の餌さをば銜へまはる
○優しころして啼く鶯は、人の厭やがる藪傳ひ
○山の鶯里へ出て啼けよ、山ぢや聽き手は更に無い
◎山の鶯里へと出れば、憎くや雀が悟氣をする

雲雀

○わらび取り〳〵牧原行けば、柴のかげから立つ雲雀
○槍や穂高を吾が物顏に、呼ぶ雲井の揚げ雲雀
○雲雀揚るよ有明山の、峯の高さと同じほど
◎聲はすれども姿は見えぬ、雲の中なる舞子島
○雲雀鳴く〳〵小一里來ても、同じころして笠の上
◎揚がる雲雀の二上り調子、引いた霞の紋に乘る

燕

○屋根は草葺き柱は丸太、何處がよいとて來た燕
○無事で來たかよ去年の燕、よくも古巢を忘れずに

○秋が來ました又來年と、古巢殘して行く燕

杜鵑

○五月闇夜に絹裂くやうな、ホツチヨカケタカほと〳〵ぎす
○錢を研いでりや三束刈つたか、鳥が來て鳴く木のみねで

【解百五十二】「三束刈つたか」「テツペンカケタカ」「ホツチヨカケタカ」「節燒し」「ホト、ギス」何れも杜鵑の啼き聲である。彼の「カツコーカツコー」と啼く所の郭公、雲公、閑古鳥ツ、鳥、フ、鳥、呼子鳥など云はれるものは似ては居れど異り、杜鵑よりも大なりとす。杜鵑が其の卵を鶯など他鳥の巢に人知れず產み入れ置き、彼等をして孵化養育せしむるは著明なる習性である。

行々子

○卵取られたあの葭切は、葭のてんびん(峰、又は頂き)でなきあかす
○積もる思ひの八千八聲、なくかよしきり夜もすがら
○厭やな葭原、夜晝無しに、鳴くよ葭切がしや〳〵と

水鷄

○八千八聲のよしきりよりも、たまの水鷄が耳に附く

○蛙ひき出されて厭む蛙、安臺平の春を知る

○蛙なく〳〵お月に焦れ、のとの俊の裂けるほど

○蛙げこ〳〵浮かれて騒ぐ、田螺や何時でも沈み勝ち

○おたまじやくし四つ足や出来て、ぬるめ、五解百四十参照（這ひ出す天気雨

○歌を詠む気で短冊苗間、こねて歩いた音蛙

○蛙が歌を詠む

○蛙ひき出されて厭む蛙、安臺平の春を知る

○蛙が歌を詠む

○蛙いた苗代短冊形の、中で蛙が歌を詠む

○歌を詠む気で短冊苗間、こねて歩いた音蛙

【解百五十四】安臺の蛙はなか〳〵學者ですから古今集の序文くらゐは見て居るです。

○おたまじやくし四つ足や出来て、ぬるめ、五解百四十参照（這ひ出す天気雨

○蛙げこ〳〵浮かれて騒ぐ、田螺や何時でも沈み勝ち

○蛙なく〳〵お月に焦れ、のとの俊の裂けるほど

○鼠川奥出て来る服は、格や櫻の枝を折る

○雪が積もれば一番俣の、尾根へ兎の罠かける

○彼の娘いたる畑の蕎麦を、山の兎が喰ひ荒す

○踊を見に出た權現様の、森の木の間の栗鼠の孫

○鼠川奥出て来る服は、格や櫻の枝を折る

○雪が積もれば一番俣の、尾根へ兎の罠かける

○彼の娘いたる畑の蕎麦を、山の兎が喰ひ荒す

○踊を見に出た權現様の、森の木の間の栗鼠の孫

○ほゝん〳〵と鳧の調べ、月に焦れるあのくひな

○乳川邊に巢をくふ水鶏、夜更け泳しや出ては鳴く

○何が惜しか此の不景気に、ほゝん〳〵と鳴くふくろ

○穩高森には朝起き鳥、晩にや鳴き十五位の鷽

○日雀チヨチヨビン日が一日、春の日長の裏山で

○日雀チヨチヨビン日がら〳〵ぜれや、ぜれ、ぜれ、日雀、日雀ぜれば金になる

○日雀ぜれば金にもなろが、人がくぜれはもめ紛雜の因

○日雀四十雀同ふなちや無いが、素手養ふのは何うなさる

○日雀四十雀同ふなちや無いが、素手養ふのは何うなさる

◎西の山から鳴いてく鳥、池田たんぼへ田螺掘りに

◎鳥鳴くともなく、鳥井の日の役で鳴く

【解百五十三】「なゝきにさし、とゝ、をゝ」「なゝきにさしそ、をゝ」「なゝきにさし、とゝ、をゝ」「なゝきにさし、とゝ、をゝ」「なゝきにさし、とゝ

尺蠖　○虫の中でも尺取り虫は、憎い虫だよ丈を取る

蟬

○土を這ひ出たかたびら蟬が、衣更へして夏のうた
○今年や豊年みん〳〵蟬が、土用以前に來て鳴いた
○松の木かげに青草敷いて、寢れば來て鳴く油蟬

蛍

○葦原やち原葭原續き、夏はおいでよ螢狩り
○じくやあはらは螢の名所、螢取り行きや田に落ちる
○螢取り行きやどんぶらに落ちる、落ちて這上りや又落ちる
○乳川川ばた生えたる葭に、風が渡れば立つ螢

機織虫（きりぎりす）

○お月や照る〳〵權現樣の、森のはたをりや夜もすがら
○野菊手折ればあの草むらで、昔をば止めたるきりぎりす
◉豆の葉裏で鳴くきりぎりす、うらみ〳〵てなきあかす

鈴虫

◉口の憎くさよあのきりぎりす、思ひ切れ〳〵切れと鳴く
○誰か行かぬか神戸の原へ、鈴虫や神戸の原で鳴く
○神戸原にて鳴く鈴虫は、ないてないて〳〵なき果てる

魚類

○犀川鮠は頭がでかい、高瀬鮠の子目がでかい
○乳川へにやくにや彼の曲り目で、雜魚が毎日鉢合せ
○目高取る子の背中を見れば、蟹の背中にさも似たり

十九、野遊び

草摘み

○見れば谷間の蕗ぼこさへも、頭もちやげて春を待つ
○石の地藏に羽織を着せて、娘草摘む栗尾道
○俺らが踊の眞似するのやら、土手に並んで出た土筆
○安曇平は住みよい所、野邊の草さへ餅になる
○みんな行きましよ木戸中揃ふて、高瀬川原へちゝこ摘み
○ちゝこ摘んだる高瀬の川原、今ぢや青田で蛙鳴く

花見

○土手をのぼりてやれ一と休み、花の櫂現芝の原

○宮の森かげまだ雪やあるに、表大門花ざかり

○五日六日は花見の盛り、七日過ぎれば葉と變る

○岩をかたどりお爛場拵せて、座敷や千疊敷青天井

○花は散る〳〵踊は續く、續く踊に花吹雪

蕨

○螺を呼ぶよな力も無くて、思案投げ首出たわらび

○への字形した山端を見れば、のしと書いたるあの蕨

○出れば取られる早蕨さへも、のしと書くとはしほらしや

○雨で崩え出た端山のわらび、早く行かなきや葉と變はる

○蕨採りには行きたいけれど、乳呑み抱へて行かりやせぬ

○紺の風呂敷横ちよに背負ふて、行くよ牧原わらび狩り

○馬羅尾の横山廻筈わらび（太き莖の形容）取りに行きましよ農休みに

○娘十二三わらびは取らで、燃ゆる夕陽を折りかざす

獨活

○谷の底にはまだ雪や有るに、尾根でうど堀る崩岳（烏川の奥）

◉誰か行かぬか武石の山へ、うどやわらびの芽を摘みに

【解百五十五】 秩父の東なる山邊から武石峠を越えれば小縣郡の武石を過ぎ丸子へ出る。武石峠の南に續く美ケ原高原は牧場もあり、近頃は又其の山野を埋めて咲く躑躅の素晴らしさを以てハイキングの絶好地として知らるゝに至った。

筍

○取りに行かぬか崩の奥へ、五月あがりに竹の子を

岩魚

○田植すませりや釣竿肩に、素間入りへと岩魚釣り

○見える岩魚が見えて〳〵釣れぬ、石を投げ込みかへる淵（馬羅尾の奥）

きのこ

○雨も降らぬに傘さして、高瀬川原に出たきのこ

○繩でさがりて取る岩茸の、下は此の世の地獄谷

○こんまら 秋はこんまら紫色の、露でむく子の手が染まる

○揃ふたお十七腰びく附けて、こんまらはんじき取りに行く

【俳百五十六】こんまらはんじき又喰してこんまらの甘酸い實を鈴實りに着ける、香昧頗る佳なり、山麓の人々之を採集し置きて冬籠りの茶菓子とする。

鈴虫捕り　○茅萱押分け鈴虫捕りは、萱の葉うらで手が切れる

二十　踊

踊り場　○踊を踊るなら乳川のはたで、淵の岩魚も出て踊る

○乳川渡れば櫻の並樹、奥にまします踊り神

○踊り行きましよ神戸のお宮、廣い芝生に散る櫻

○別に名も無い芝原なれど、夏は踊で芝切れる

○力自まんのばんもち原へ（万言にて力技かばんもちと云ふ）踊自まんが押して來た

○つくれ（繕ふの約か、家奮の療治のこと）しる原踊に取られ、見れば伯樂（獣醫）仲間入り

○上の段から皆様ごらん、踊や下段の芝の原

○踊りましよかえ好い芝原だ、芝がまん丸く切れるほど

○芝の切れるは其りや好いけれど、借りた着物の裾切れる

○借りの有るとこ別道を廻り、早く踊り場へ來ればよい

○踊り行くとて近道をかけて、木中原（當盤村）にて目を突いた

○野暮れ山暮れ月夜となれば、辻に踊の輪が出來る

○さアさ踊れや踊り子が揃ふた、お月様さへ待ちかねる

○此宵此の家の廣庭借りて、八重に踊の輪を作る

◉踊を踊るならきりゝとしやんと、此所は道筋人が見る

○神代からなる踊の姿、殘る安曇の夏の宵

踊り始め　○みんな寄つて來い業平小町、わたしや下手でも音頭取る

○下手なわしでも出しますからにや、返しや皆様どんと出せ

○安曇八月村から村へ、踊る輪の數唄の數

○安曇踊とダリアの花は、末は大きく輪に開く

○安曇踊は高根の花に、蝶々焦れて舞ふ如く

○お主や何うした顔色青葉、少し踊れよ櫻色

○踊り度いけど畦道を來たら、裾が濡れて〳〵踊れない

○踊や踊りたし手拭や古し、お月や雲間へは入りやよい

◉見手の多さよ踊り手の無さよ、見手と踊り手と代りやよい

◉誰も踊らにやおら三人で、四角三角蕎麥の形

踊らぬ人

○此宵踊らにや娘はやらぬ、小豆燒餅やなほやらぬ

◎踊を見て居て踊らぬものは、足がてんぼか手がちんば

【解百五十七】 此の歌一足がちんばか手がてんぼ」の間違ひである事に間違ひは無いが、斯う間違はぜて置く所に此の歌の値打があると思召せ。

◎踊を踊る時踊らで置いて、あとでくやむな年を取りて

◎いくら見て〳〵も踊らぬものは、速く小便まつて寢るがよい

○いくらしやれても（容儀振つても）踊らぬ人は、ぼろの案山子と同じこと

○夏は夜短か、お十七様よ、早く踊らにや夜が明ける

○踊を踊らにや振袖着ても、長い袂が無駄になる

○親が著せたるあの振袖で、此宵踊らにや不孝者

○色の白いは七難かくす、踊りはじめは顏かくす

○赤いたすきをきり〳〵としやんと、踊り上手の目しるしに

飛入り

◎他村若い衆よく來て呉れた、裾が濡れつら草の露

○お名は知らねど見たよな御方、去年踊の輪の中で

○頭禿げよが腰や曲らうが、生きて居るうちや踊りたい

○主さよく來た踊の中へ、唄で知らせる胸の中

○踊る輪の中がまゐを落し、拾ふつもりで目を廻す

○人におくれて俺ら輪の中へ、唄の挨拶忘れたか
○言葉かければ踊がだれる、唄で述べます御挨拶
○入れてお呉れよ踊の中へ、霙飼ふ間に來たわたし
○せまくなる程見るとこ取られ、踊る人數がふえて來た
○日傘かしげて通りし娘、夜は踊の輪にまじる
○瑠璃の玉よりまぶしい方が、おらが踊の中に居る

踊の姿

○田植ぬのこに田の草袷、踊るお盆にや單衣
○印ばんてん半もゝ引で、霙は働き夜は踊る
○踊る若い衆はまだ木の林檎、赤い顏して頬冠り

【解百五十八】林檎のまだ木に在るうちは虫害を避けて紙袋を被らせて置く。

○かぶる手拭顏三角に、出して踊の輪にまじる
◉かぶり揃へた白手拭は、藪に尾花の出たごとく
○向ふ鉢卷片はだぬぎで、踊る手先に月を招く

○踊る最中ほゝつこ(ほゝ冠り)が取れて、禿げた頭をカキクケコ
○踊師匠様べにおしろいよ、安曇踊ちや髯だらけ
○羽織袴で踊るは誰だ、あれは俺の方の村長さま
○つゞれぼろでも彼の子が踊りや、ぼろも錦のあやと見る

音頭取

○霙は田に出て田の草取るが、夜は踊の音頭取る
◎音頭取ります聲張り上げて、村の隅々響くほど
○踊や大輪で音頭は一人、返しや頼むぞ皆の衆
○安曇踊の其の中房で、聲も高瀬の音頭取
○あやを飾りし文句の上で、鈴をころばす音頭取
○安曇踊は大きな踊、山で木玉が返し唄
○踊る娘にお髯がまじる、しかもお髯が音頭取

○お月や照る〳〵音頭は續く、揃ふ手拍子足拍子
○あとの文句はおまかせ申す、誰か頼むぞ音頭取り
◉わしが音頭を取るのぢや無いが、先きのお方の息をつなぐ
◎先きのお方は名題の音頭、鈴の音がしたりん〳〵と

唄

◉唄へ〳〵と唄せめられて、唄は出ませぬ汗が出る
○唄は白菊たゞもぢ〳〵と、顔にもみぢ葉目にしぐれ
◉唄を出すなら續けてお出し、唄の切れ間は聞きにくい
◉わたしや唄好き唄はにやならぬ、唄で此の身が果てるとも
◉唄ひなされよお唄ひなされ、唄で御きりやうが下りやせぬ
◉聲が涸れたら黒豆、石蕗、石蕗こゞ立つ身の藥

月明

◉お月やちよろり出て山の腰を照らす、娘縮子の帶腰を照らす
【餘百五十九】下の句また「紗綾や綸子で腰を照らす」とも唄ふ。

○禿げた頭も踊にまじりや、月が籠して光らせる
○お月様さへはだしで逃げる、踊上手の禿頭
○雲の間へ笑顔を出して、月も踊を見て通る

踊手は

◉揃ふた〳〵よ踊子が揃ふた、稻の出穗よりまだ揃ふた
◉稻の出穗には出むらもあるが、揃ふた踊にやむらが無い
○鳶は田の草夜は踊り子と、御苦勞様だよ若い衆は
◉踊をこはすな小若衆様よ、娘夜遊や盆ばかり
○踊を習ふて麥踏みしたら、麥が五斗ばか餘計取れた
○踊を習ふたら今年の秋は、稻を刈るにも足や輕い
○踊を踊るよに皆氣が揃ふや、山も崩せば海も乾す
○踊を踊れやをどれや踊、をどる手足にや蚊はさゝぬ
○をどる事なら三度の食を、四度にされても厭とやせぬ
【餘百六十】「二度にされても」の間ちがひの如くにして實は空呆けて四度にして貰ふと云ふ手が

あるとは亦此の歌の値打なり。

○昔や踊れば飛ぶ鳥や落ちた、今ぢや藥鑵に湯氣が立つ

○俺が踊に惚れないものは、木佛金佛石佛

○松川名物踊か蕎麥か、主のそばにて踊りたい

○心行くまで踊れや唄へ、月もかげるな日も出るな

◉踊りましよかえ踊らせましよか、月が山かげは入るまで

○君と踊ろか有明月の、うすくなるまで消ゆるまで

○他村若い衆お名殘り惜しや、ならば止めたいあの電車

踊さびれる

○踊やさびれるペガス、スクエア、空の中ほど越しかゝる

【解百六十一】四つの星が四隅に陣取るペカスス、廣場、其れが空の中ほどを越しかゝるのは眞夏の夜も更け踊もさびれる一時二時頃である。次ぎの歌、天の川が南北から東西に轉じ切るのも亦同時刻。

○踊や續いて疲れた筈だ、天の川原が西東

○月は傾く踊は更ける、袖は夜露で重くなる

○おくたびれならうち行つておよれ(寢よ)、天の川さへ横になる

○踊や淋びれて三人四人、見れば山端にかゝる月

○踊やさびれる頼よりのお月や、西の山端に落ちかゝる

○踊り半ばと思ふて居たに、お月や落ら行く岳の峯

踊仕舞

○踊りたいのは山々なれど、更けて歸ればしかられる

○踊や續くに東が白む、高根(大町の西方)あたりか鷄のこゑ

○踊り過ぎたか早や鷄や鳴いた、見れば夜露に濡れた袖

○まめで達者で又來年も、踊りますぞえ此の庭で

○踊りつかれて夜更けて歸る、道に稻妻草の露

○踊りすませて來て寢たけれど、耳に音頭がまだ殘る

○日本アルプス夜はほの〳〵と、明けて踊の輪が消える

右歌詞總計　　壹千壹百四拾七首也

內◉印	六拾壹首
◎印	七拾四首
○印	壹千○拾貳首

▲附　言

右安曇節歌詞は古來の安曇盆唄より採用せるもの丶外は全部安曇節及び踊創業以來の出詠であるが、其の一部は家元自身の苦吟に成り、他は鄉土各地の人々の傑作で必ずや後昆に傳唱せられ行くべきもの丶みである。其して又此等傑作は多くは出詠者より直接家元へ送られた る詠草及び各地開卷にて家元其の選を爲したる中より採り、或ひは外宗匠各位の高選に成り家元へ報告を賜へる中より加へたるものも亦少なからず。要するに十數年來家元の手許に於て知り得たる限りの詠草に就き、嚴選推敲幾回の後各地踊會に發表、引續き好評裡に唄はれ踊られつ丶あるもの丶みを拾ひ出で、乃ち本書に載せたる次第なれば、謂はゞ此は安曇節代表歌詞大全と申し得べく、安曇節歌詞が特に優秀を以て推稱せられ、且つ其の數の斯く夥し

く、鄉土の隅々遺る所無く歌ひ出され居るは歸する所各地同好諸賢の熱心なる出詠及び宗匠各位の同情溢るゝ支援の賜に外ならず。されば今回も彼の初版の如く、せめて出詠者の住所雅號、芳名等を附錄として揭載し度きは山々なりしも如何せん今家元に記錄せる分のみにても三百餘名に上り斯る兎園の小冊子として到底載錄し得る所にあらざれば心ならずも之を省略し、單に家元自家の記錄に止めつ丶、其の鄉土文化に致されたる功績と併せて家元に與へられたる厚情とに對し永く感謝することゝしたのである。なほ又今後各地に於て續々詠み出でらるべき歌詞に就ては願はくば本書三版の機を得て之を發表いたしたい。

大正十四年八月十日 初版印刷
大正十四年八月十五日 同發行
昭和九年十二月二十日 再版印刷
昭和九年十二月二十五日 同發行

不許複製

安曇節・安曇踊
著作權之章

增訂再版 信州安曇踊 大尾

定價金拾五圓

長野縣北安曇郡松川村二三三
著作者兼發行者 榛葉太生
東京市芝區田村町七
印刷者 宮本廣吉
東京市芝區田村町三丁目七番地
印刷所 小林印刷所

發行所 長野縣北安曇郡松川村二三三 安曇踊會

秘文

雨乞唄（增訂再版 信州安曇踊 別錄）

左に錄するは安曇踊の雨乞唄である。此等を唄へば必ず降雨あるを以て、雨乞の時に限り用ゆる秘文とし、平素は固く封じ置くべし。是れ他の歌詞と引別けて茲に籠め置く所以なり。

○今日の踊は雨乞踊、踊る姿も蓑や笠
○揃ふた蓑笠雨乞踊、どんと降れ〳〵濡れてやる
○叶ふ事なら一と雨ほしや、天の川をば逆か落し
○安曇平の雨乞踊、祈る穗高のわたつ神
○雨の欲しさを一重に願がや、八重に雲湧く穗高岳
○安曇平に降れ〳〵どんと、梓高瀨の濁るほど
○願ひ叶ふて降る其の雨は、路で鯉鮒捕れるほど

以上

增訂再版 信州安曇踊 大尾

大正十四年八月十日 初版印刷
大正十四年八月十五日 同發行
昭和九年十二月二十日 再版印刷
昭和九年十二月二十五日 同發行

不許複製

安曇節・安曇踊
著作權之章

增訂再版 信州安曇踊 大尾

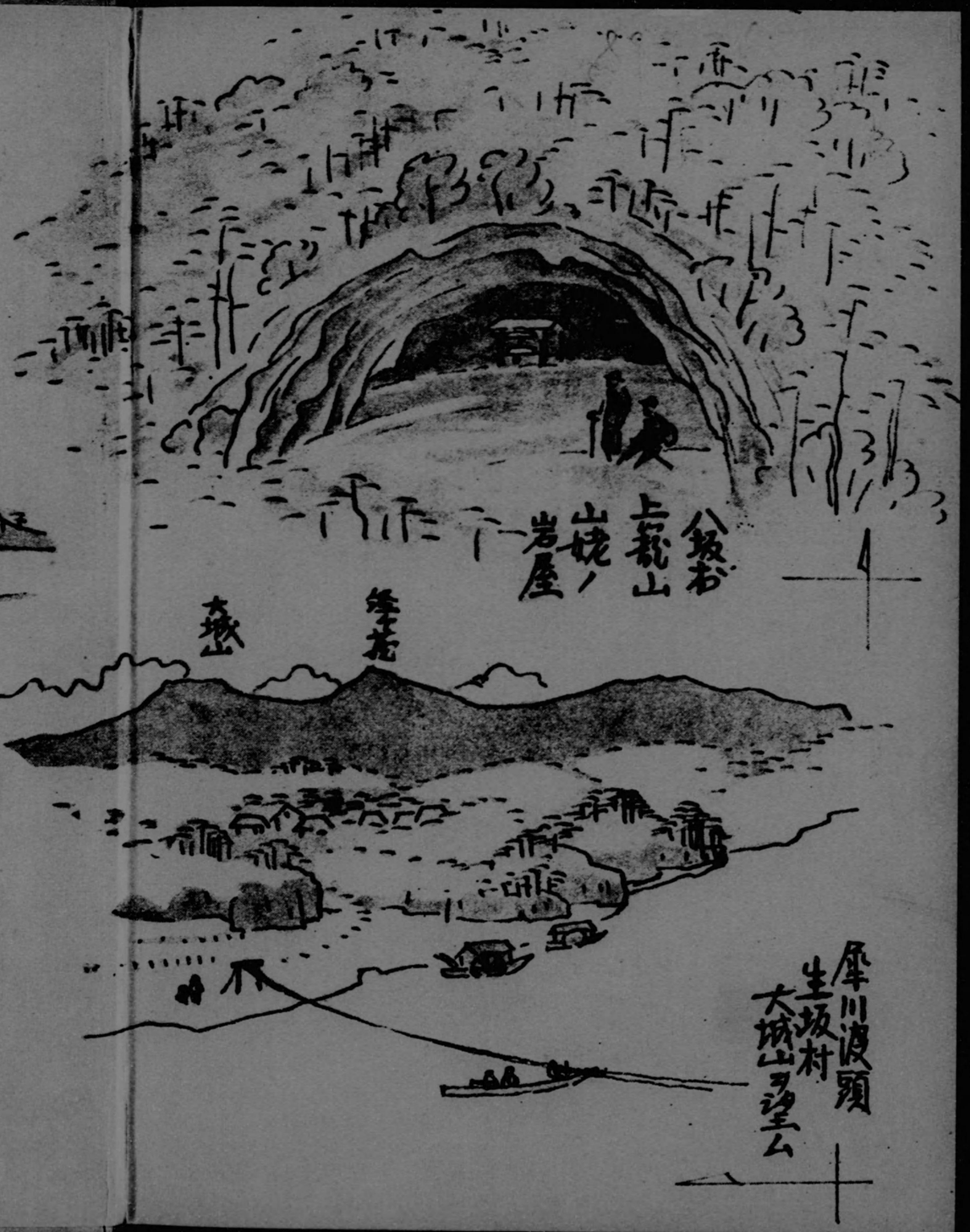
定價金拾五圓

長野縣北安曇郡松川村二三三
著作者兼發行者 榛葉太生
東京市芝區田村町七
印刷者 宮本廣吉
東京市芝區田村町三丁目七番地
印刷所 小林印刷所

發行所 長野縣北安曇郡松川村二三三 安曇踊會

美麻村大塩
靜櫻ノ図

犀川名物
舟水車


八坂村
上荒山
山姥ノ
岩屋

大城山
峯花

犀川渡頭
生坂村
大城山ヲ望ム